

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第41集

うえ たいら
上 の 平 遺 跡

1992

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

北設楽郡は愛知県の北東端、いわゆる奥三河に位置し、中部地方を縦断する木曾山脈の南端に位置しており、標高200～1000m の山間地において人々の生活が営まれております。郡内を走る大小さまざまな河川は多くの谷地形を形成し、水系も東部では天竜川、北西部では矢作川、南西部では豊川に属しています。したがってこの地域は、三水系の上・下流域からのさまざまな影響を受けており、太古の昔より多方面との交流によって、地域独特の文化、生活スタイルが営まれてまいりました。

このたび愛知県民生部高齢化対策室によって、北設楽郡東栄町大字中設楽字松久保地内に特別養護老人ホームが建設されることになりました。この建設予定地には愛知県遺跡分布地図に記載の「上の平遺跡」（遺跡番号71009）があり、（財）愛知県埋蔵文化財センターでは愛知県教育委員会からの委託を受けて、建設工事に先立ち、事前調査を行いました。その結果、縄文・弥生時代を中心とする遺構、遺物を検出することができ、奥三河地域の歴史に新たな資料を提供できることになりました。

調査にあたりましては、愛知県教育委員会、愛知県民生部高齢化対策室、東栄町教育委員会をはじめとする関係諸機関、地元住民の皆様から多大のご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げる次第であります。

最後に本書が地域史の理解、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成4年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 高木鐘三

例 言

1. 本書は愛知県北設楽郡東栄町大字中設楽字松久保、桐久保、上の平に所在する、上の平遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、愛知県民生部高齢化対策室による特別養護老人ホーム建設に伴う事前調査として、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会の委託を受け、平成2年10月から平成3年3月にかけて行った。調査面積は3750㎡である。
3. 現地調査は、地元住民の方々の参加を得て、本センター調査課主査 山田 基、嘱託員（当時）松田 訓が担当した。
4. 調査にあたっては、次の各関係機関の御協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課、愛知県民生部高齢化対策室、東栄町教育委員会
5. 本書の編集は、松田 訓が行った。執筆分担は次のとおりである。
I～V・VII 松田 訓
VI-1 (株)パリノ・サーヴェイ
なお、遺構、遺物の撮影は松田 訓が行った。
6. 遺物整理作業については次の方々の協力を得た。
洗浄・注記 金指立子、伊藤隼人
実測・トレース 棚木えみ子、西山朋子
7. 本書に示す座標数値は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。また、本書に示す海拔表記は、東京湾標準（TP）の数値である。
8. 遺物の整理番号と登録番号の対照は、表として本文中に示した。
9. 調査記録、出土遺物は、（財）愛知県埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の執筆にあたり次の諸機関、諸氏に御指導・御助言をいただいた。記して感謝したい。（敬称略）
奥三河郷土館、さくま郷土遺産保存館、津具郷土館、東栄町立博物館
豊根村教育委員会、名古屋大学考古学研究室
石原詳宣、伊藤真祐、伊藤平八、内野 正、金田新也、斎藤基生、庄田靖彦
立松 宏、寺内隆夫、鈴木富美夫、永井宏幸、野口哲也、平賀孝晴
村松信三郎、山崎純男、渡辺 誠

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置	2
2 歴史的環境	4

第Ⅲ章 調査の概要

1 調査区	5
2 調査の方法	5

第Ⅳ章 遺構

1 基本層序	7
2 遺構	9
(1) 縄文時代	10
(2) 弥生時代	10
(3) 歴史時代	13

第Ⅴ章 遺物

1 土器	14
(1) 縄文時代	14
(2) 弥生時代	16
2 石器	18

第Ⅵ章 自然科学的分析

1 土器の胎土分析	24
-----------	----

第Ⅶ章 まとめ

付表	39
----	----

挿図目次

第1図	愛知県位置図	2
第2図	東栄町位置図	2
第3図	北設楽郡地形図	3
第4図	周辺遺跡位置図	4
第5図	調査区位置図	5
第6図	A区下層検出面地形測量図	6
第7図	調査区基本層序模式図	7
第8図	調査区土層断面図	8
第9図	A区遺構分布図	9
第10図	S K 122平面及び断面図	11
第11図	S K 147平面及び断面図	11
第12図	S X 103平面及び断面図	11
第13図	S B 102平面及び断面図	12
第14図	S D 01・02平面及び断面図	13
第15図	縄文時代土器実測図	15
第16図	弥生時代土器実測図（1）	17
第17図	弥生時代土器実測図（2）	18
第18図	石器実測図（1）	20
第19図	石器実測図（2）	21
第20図	石器実測図（3）	22
第21図	重鉱物顕微鏡写真（1）	35
第22図	重鉱物顕微鏡写真（2）	36
第23図	軽鉱物顕微鏡写真	37

表 目 次

第1表	調査日程表	1
第2表	石器組成表	23
第3表	打製石斧材質組成表	23
第4表	磨製石斧材質組成表	23
第5表	石鏃材質組成表	23
第6表	石刀材質組成表	23
第7表	鉤形石器材質組成表	23
第8表	凹石材質組成表	23
第9表	叩石材質組成表	23
第10表	石匙材質組成表	23
第11表	石錘材質組成表	23
第12表	スクレイパー材質組成表	23
第13表	ネガ説明表	29
第14表	胎土分析試料一覧表	30
第15表	胎土分析試料組成表	31
第16表	鉱物組成ダイアグラム（1）	32
第17表	鉱物組成ダイアグラム（2）	33
第18表	鉱物組成ダイアグラム（3）	34
第19表	土器対照表	39
第20表	石器対照表	40
第21表	遺物出土地点一覧表（1）	41
第22表	遺物出土地点一覧表（2）	42

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査にいたる経過

上の平遺跡は、愛知県遺跡分布地図に散布地として記載された遺跡（遺跡番号71009）で、北設楽郡東栄町大字中設楽字上の平、桐久保、松久保地内に所在する。平成2年春、この記載範囲内に愛知県民生部高齢化対策室によって、特別養護老人ホームが建設されることになった。建設工事に先立ち愛知県教育委員会文化財課では、（財）愛知県埋蔵文化財センター、東栄町教育委員会と共に、予定地内の埋蔵文化財の包蔵状況、遺跡の広がりを確認するための確認調査を行った。試掘坑からは明瞭な遺構は認められなかったものの、石製品、須恵器、陶器片などの出土をみたことから、事前に発掘調査が必要と判断した。

（財）愛知県埋蔵文化財センターではこのような事前協議を経て、愛知県教育委員会からの委託を受け、東栄町教育委員会の協力のもと、平成2年10月から急拠発掘調査を実施した。

2 調査の経過

調査区はA・Bの2地区に分割したが、A区3000㎡については平成3年10月1日より10日まで、B区750㎡については11月5・6日に表土剥ぎを実施した。このうちB区については、トレンチ掘削後精査を行ったが、遺物包含層の存在は確認できず、また遺構も検出し得なかったため、遺跡範囲外と認めこの時点で調査を終了した。A区はトレンチ掘削時に、人為的な堀り込みが2面確認できたため、上・下2回の検出が必要となった。上面の調査は、測図、写真撮影も含めて、12月5日までを費やした。下面の調査及び補足調査の終了は、平成3年3月29日であった。

調査地は山間部の、陽あたりの良い南向きの緩斜面であったため、温度差が激しく、12月中旬からは厚く霜柱が立ち、防水シートの効果もほとんどなく、積雪日も多かったため、12月から始めた下面の調査には特に時間を要した。

	平成2年 10月	11月	12月	平成3年 1月	2月	3月
A区						
B区						

第1表 調査日程表

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置



第1図 愛知県位置図



第2図 東栄町位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置する。上の平遺跡の所在する北設楽郡東栄町は、愛知県の北東端、奥三河地方に属し、その東境は静岡県と接する。この北設楽郡の三河高原は、日本を代表する大断層である中央構造線の内帯にあり、この大断層に斜交していくつかの小断層が走り、複雑な地質構造を形成している。したがって河川によって形成された谷地形も複雑な様相を呈し、郡内の水系も矢作川、豊川、天竜川に分かれる。特に基盤石山を中心とした半径1kmにも満たない地域には3水系が集中している。地質構造からは領家変成帯に属し、遺跡に立地する中設楽周辺は、堆積岩（礫岩・砂岩・頁岩）を主体とする北設楽層群の川角累層にあたる。

遺跡は大千瀬川が御殿川と合流し大きく蛇行する内側（左岸）に舌状に発達した河岸段丘高位面上に立地し、周辺には幾筋もの沢が大千瀬川に向かって流れ落ちている。中でも調査区の北西約100mの距離に位置する湧水地は、中設楽集落の簡易水道の水源として利用されている。これらの大小河川は天竜川水系に属しており、直線距離にして約8kmで本流と合流する位置にある。調査地は標高約300メートルを測り、大千瀬川との比高差は約50メートルで、周囲は杉、檜を中心に、植林が丁寧に施されている。調査地は南向きの陽あたりのよい緩斜面で、北側には急な斜面が続く。また、東西には沢が展開していることから、生活するための条件は比較的良好であったと思われる。調査地内の中央やや東寄りには緩斜面ではあるが、南北方向の尾根筋が通っており、これより南東、南西方向に伸びる緩斜面に民家が散在している。こうした立地から、調査地の旧態は畑地として利用され、茶、野菜、穀類が栽培されていた。



第3図 北設楽郡地形図(国土地理院 1/20万地勢図「豊橋」)

上の平遺跡の所在する北設楽郡の気候は、表日本式気候に属しているとはいえ山間部にあたるため、豊橋、名古屋など県内の平野部と比べると冷温で、暖候期には南から南東向きの場所で地形性降雨が起こりやすく、降水量は多い。こうした場所では、冬季には北西の季節風は遮られ、表日本型の好天によって日中の気温は平野部と変わらないほどであるが、内陸性の影響が強く現れるため、夜間の冷え込みはきびしい。したがって平野部に比べて春が遅く秋が早い、植物期間は180～220日、無霜期間も170～200日と短い。

2 歴史的環境



第4図 周辺遺跡位置図(国土地理院 1/5万地形図「田口」)

北設楽郡において現在確認されている遺跡は、旧石器時代までさかのぼる。豊根村の茶白山遺跡、設楽町の市場口遺跡、津具村の松山遺跡、稲武町のアライ遺跡が、県の分布地図には記載されている。縄文時代になると、遺跡数は飛躍的に増える。地理的環境でも述べたように北設楽郡には、主要となるものだけでも三水系が集中しており、これにそれぞれの谷地形から注ぐ小河川などが加わって複雑な山峡をつくっている。したがって小集落を営むための絶好な環境を形成したようであり、キャンプサイトの性格のものも含めると、確認されている遺跡数は337ヶ所を数える。これが弥生時代にはいると、単純なカウントではあるが遺跡数は51ヶ所を数える。但し、継続的な集落跡は確認されていない。

上の平遺跡の近隣に所在するいくつかの遺跡を紹介すると、縄文時代では晩期（水神平期）土器棺を窺わせる遺存度の良い土器が出土した東栄町大字月の引田遺跡、同町本郷の桜平遺跡がある。弥生時代では、郡内でただ一ヶ所遠賀川系土器が出土している同町本郷の桜平遺跡、郡内唯一の弥生時代の堅穴住居跡が検出された同町中設楽の西向遺跡、中・後期の土器が確認された同町本郷の寄近遺跡などがある。また鎌倉時代の山城では、設楽氏の居城と伝えられる同町中設楽の県指定史跡設楽城跡がある。

上の平遺跡はその自然立地からして、狩猟・採集生活を営むのに適した地にあり、また大千瀬川流域に早い時期から入り込んだ弥生文化の息吹を受けるなど、縄文、弥生時代を通じて人々が住みやすい環境であったといえよう。

参考文献

鈴木富美夫ほか（1968）『北設楽郡誌 原始～中世』北設楽郡誌編纂委員会

第Ⅲ章 調査の概要

1 調査区

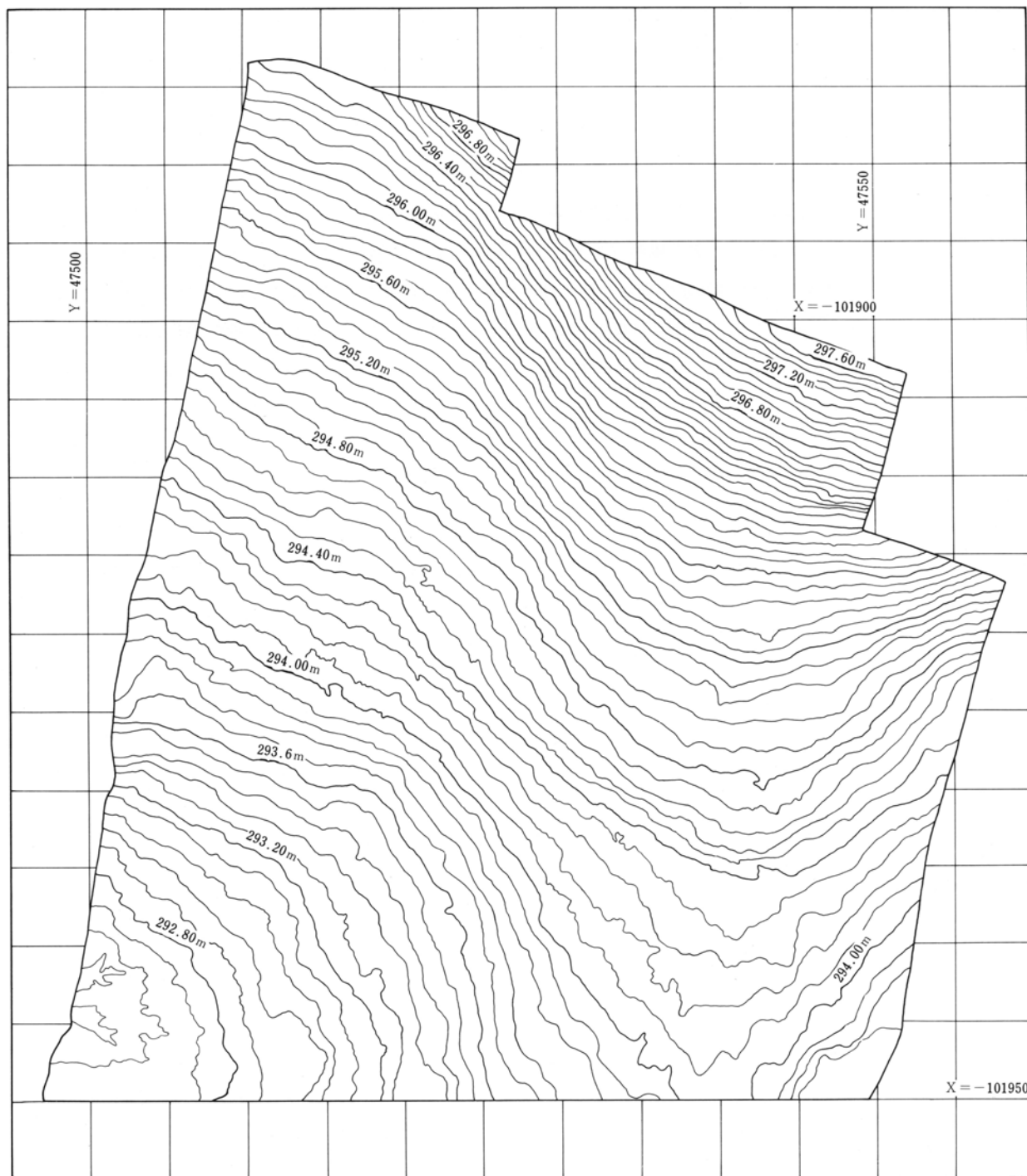
本調査に先立って行われた確認調査の結果から、上の平遺跡は広範囲にわたって展開している可能性が考えられたため、調査区は町道をはさんで2地区設定した。いずれも畑地として利用されてきた場所であり、大千瀬川によって形成された中位段丘に発達した中設楽集落から30～40m北へ登った地を開けた南向きの緩やかな斜面だが、A区では北側の山裾に近接するにしたがって傾斜はきつくなってゆく。B区はほとんど平坦であった。A・B区とも陽あたりは良好なため乾燥した水はけのよい土地であるが、A区西側は町道に沿って排水路が通っていることもあり、表土を除去した時点から水がしみ出て、調査終了まで湿地状態であった。

2 調査の方法

調査区内の表土の除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。この調査地に排土処理のためにベルトコンベヤーを配し、調査区南に排土置場を設けこれをまとめた。両区共に50cm幅のトレンチを壁面に沿って入れたがB区においては人為的な掘り込み・包含層が存在しないことが判明した。A区においては上下2面の掘り込み面が確認できたため、2面調査を必要とし、上層から下層の掘り込み面までの掘り下げに際しては、実質的にはグリッド毎に検出作業を繰り返して到達する方法をとった。



第5図 調査区位置図

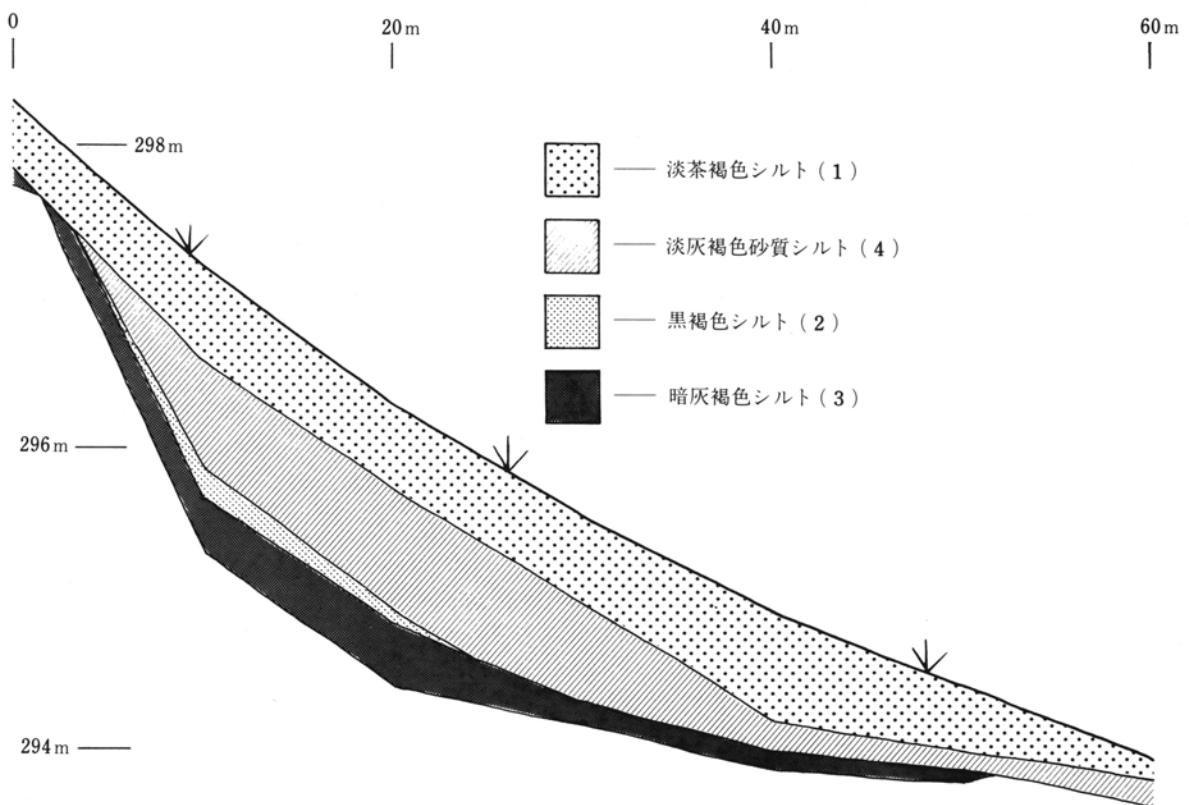


第6図 A区下層検出面地形測量図(8cmコンター)

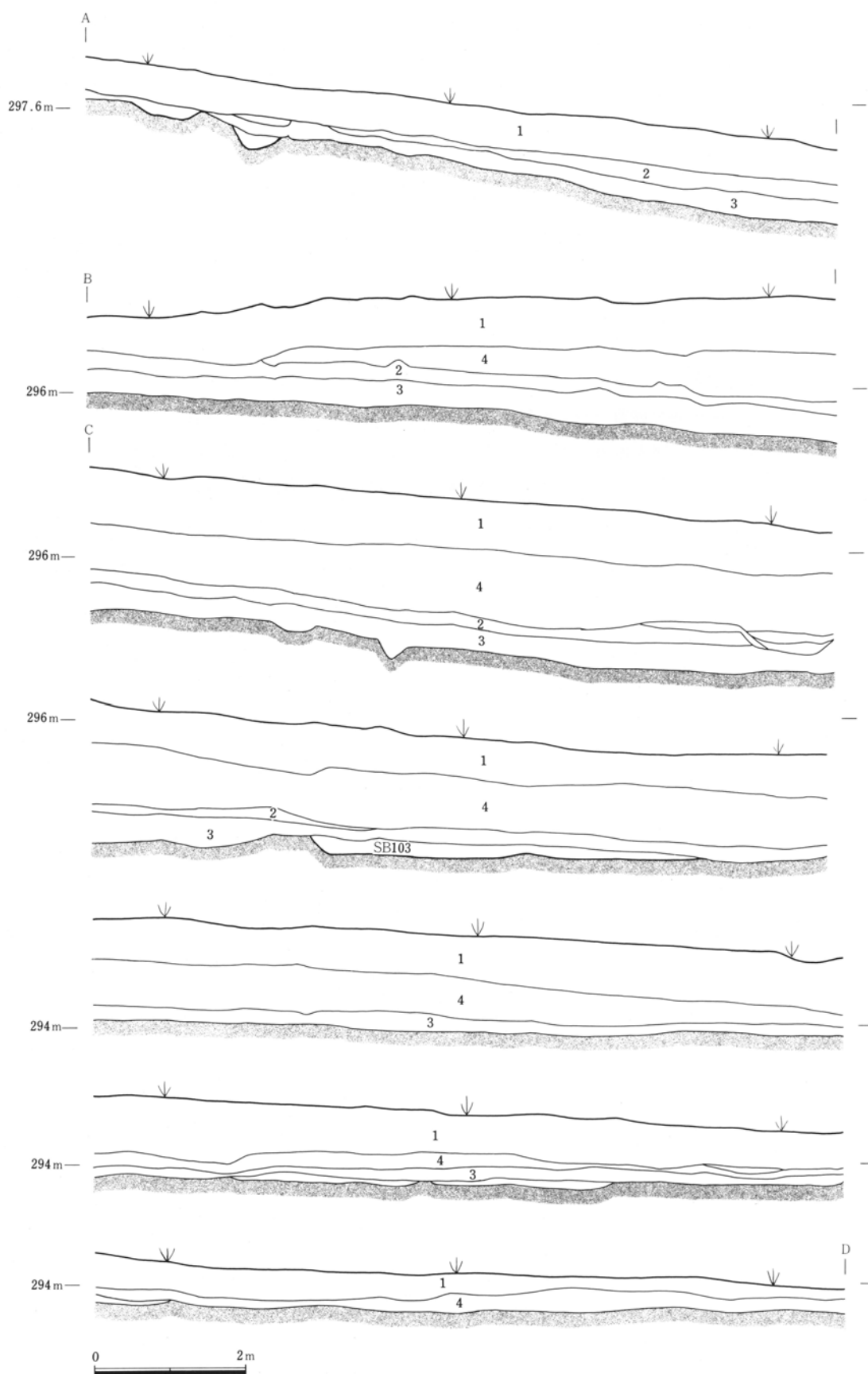
第Ⅳ章 遺構

1 基本層序

上の平遺跡の基本層序を概観すると、第7図のような状況がみてとれる。地表面は標高294～8mで、地表直下には旧耕作土である淡茶褐色シルトが20～90cm程堆積していた。調査区全体を覆っているのはこの表土のみで、その下には山裾から少し下った辺りからしまりのよい淡灰褐色砂質シルトが厚いところで約1 m堆積していた。上面の遺構はこの淡灰褐色砂質シルト層を掘り込んでいたため、表土除去作業はこの層直上までとした。この淡灰褐色砂質シルトにおいては、遺構、遺物の検出状況は希薄で、砂岩を中心とした大～小角礫が多く含まれていた。この層の下には、部分的に粘性をあまり持たない黒褐色シルトが10～30cm程堆積しており、さらにこの下には暗灰褐色シルトが15～40cm程堆積していた。そして下面の遺構、遺物はこの暗灰褐色シルトを掘り込んでおり、密度は少ないながらも縄文・弥生時代の資料を検出することができた。なお、この暗灰褐色土層の下には基盤層として淡黄褐色粘質土が調査区全体で確認できた。

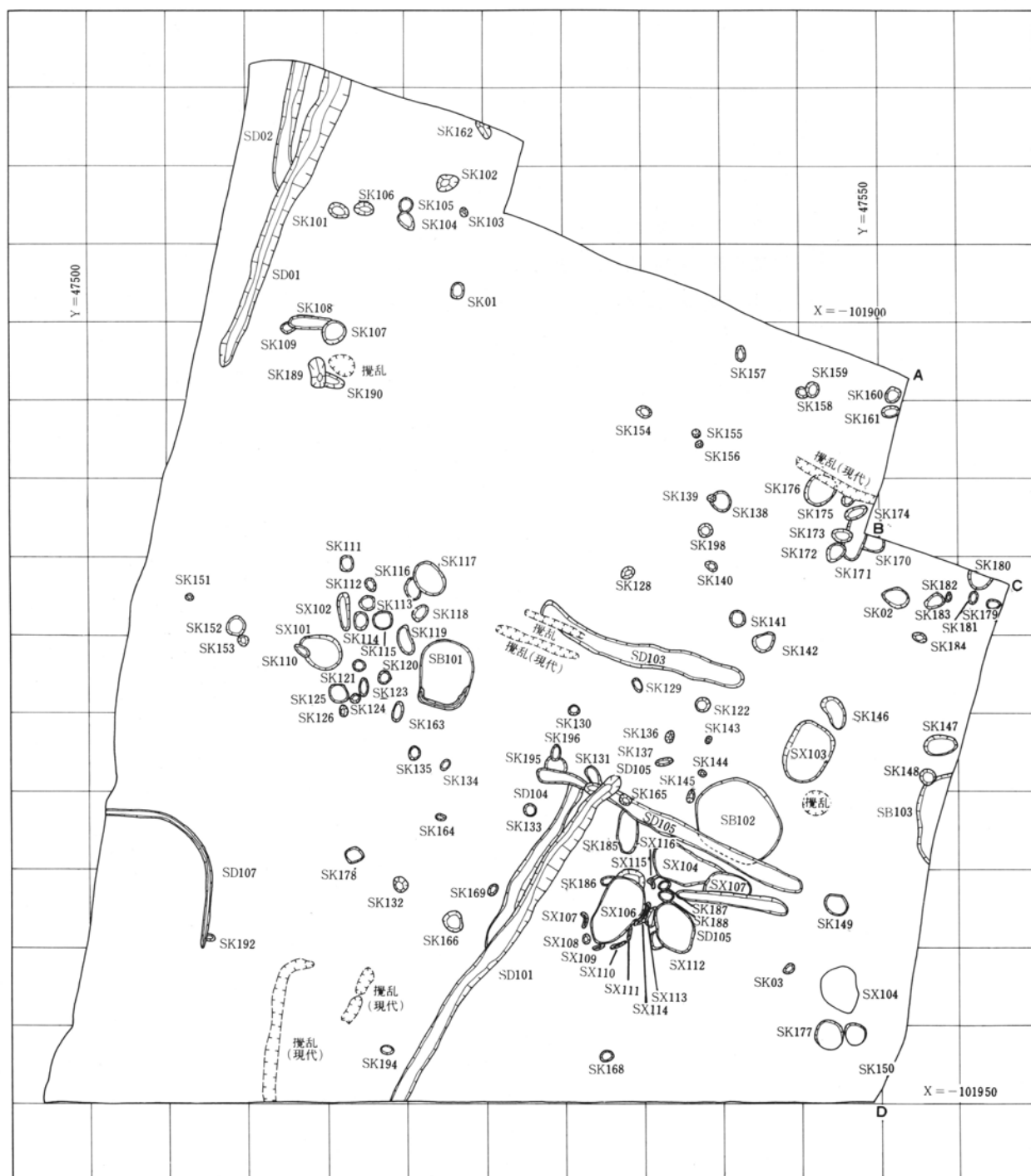


第7図 調査区基本層序模式図



第8図 調査区土層断面図(A～D地点は遺構分布図に表記)

2 遺構



第9図 A区遺構分布図

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構はA区のみで検出できたが、判定し得る遺物の出土量が少なく土坑状の掘り込み6基を数えるに留まった。

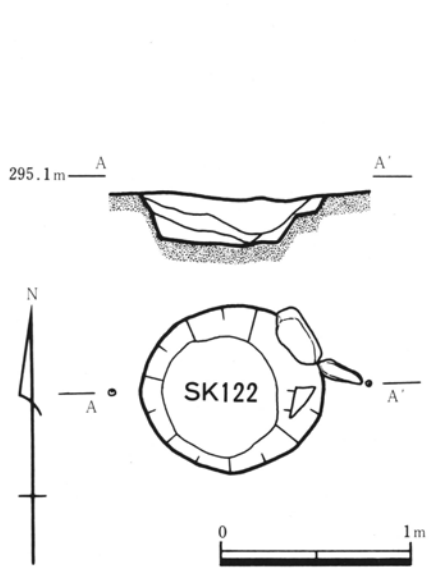
遺構検出面は標高294～297mで、いずれも緩斜面（南向き）に掘り込まれている。この他無遺物ではあるが、同一レベルにて土坑状の掘り込みが約50基ほど検出できた。これらの掘り込みの埋土は、いずれも暗灰褐色シルトであった。縄文時代のものと思われるこれらの遺構は、一定の規格性、方向性は持たず、空間的特質、相互関係については窺い得ない。以下、各遺構について説明する。

- SK101 調査区西側北寄りに位置する。検出高は標高295.9mを測り、平面形態は楕円形を呈し、長径130cm、短径90cm、深さ13cmを測る。埋土は暗灰褐色シルトを基調とし、深鉢（30）の破片が1点出土した。
- SK138 調査区中央やや北寄りに位置する。検出高は標高296.0mを測り、平面形態は不整円形を呈し、長径130cm、深さ29cmを測る。埋土は暗灰褐色シルトを基調とし、深鉢（13）の破片が1点出土した。
- SK145 調査区中央やや東寄りに位置する。検出高は標高294.7mを測り、平面形態は楕円形を呈し、長径80cm、短径40cm、深さ25cmを測る。埋土は暗灰褐色シルトを基調とし、深鉢の口縁部突起片（7・9、別個体）が2点出土した。
- SK146 調査区中央東寄りに位置する。検出高は標高294.9mを測り、平面形態は楕円形を呈し、長径110cm、短径90cm、深さ24cmを測る。埋土は暗灰褐色シルトを基調とし、鉢の口縁部（35）と思われる破片が1点出土した。
- SK171 調査区北側やや東寄りに位置する。検出高は標高296.0mを測り、平面形態は楕円形（推定）を呈し、短径130cm、深さ31cmを測る。埋土は暗灰褐色シルトを基調とし、深鉢の口縁部片・胴部片（20・24、別個体）が出土した。
- SK197 調査区中央南側に位置する。検出高は標高294.2mを測り、平面形態は不整円形を呈し、直径30cm、深さ10cmを測る。埋土は暗灰褐色シルトを基調とし、深鉢と思われる口縁部片（18）が1点出土した。

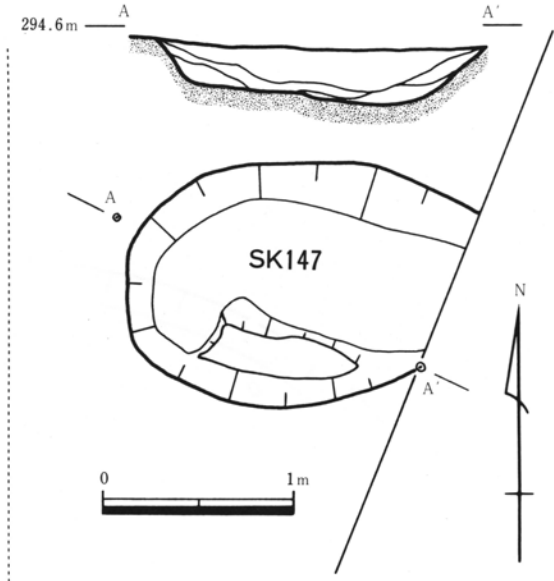
(2) 弥生時代

弥生時代の遺構は縄文時代同様A区のみで検出できたが、やはり判定し得る遺物の出土量が少ないことから、竪穴住居跡と思われるもの1ヶ所、土坑状の掘り込み2基を数えるに留まった。

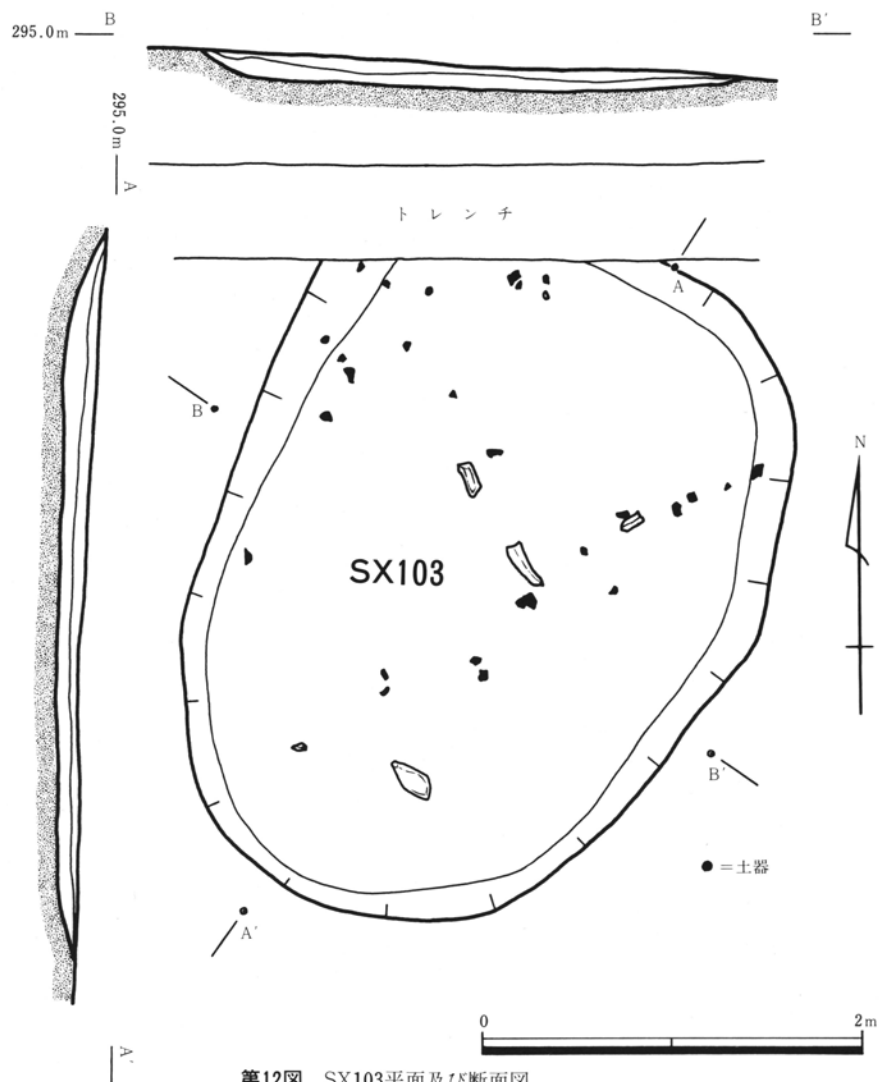
遺構検出面は294.4～295.0mで、調査区中央やや東寄りの尾根筋から、南東方向にのびる斜面に掘り込まれている。これらの遺構の埋土は、基本層序の項で図示した第2層（黒褐色シルト）であったが、この層中では検出を成し得なかったため、縄文時代の遺構と同一面での検出になった。以下、各遺構について説明する。



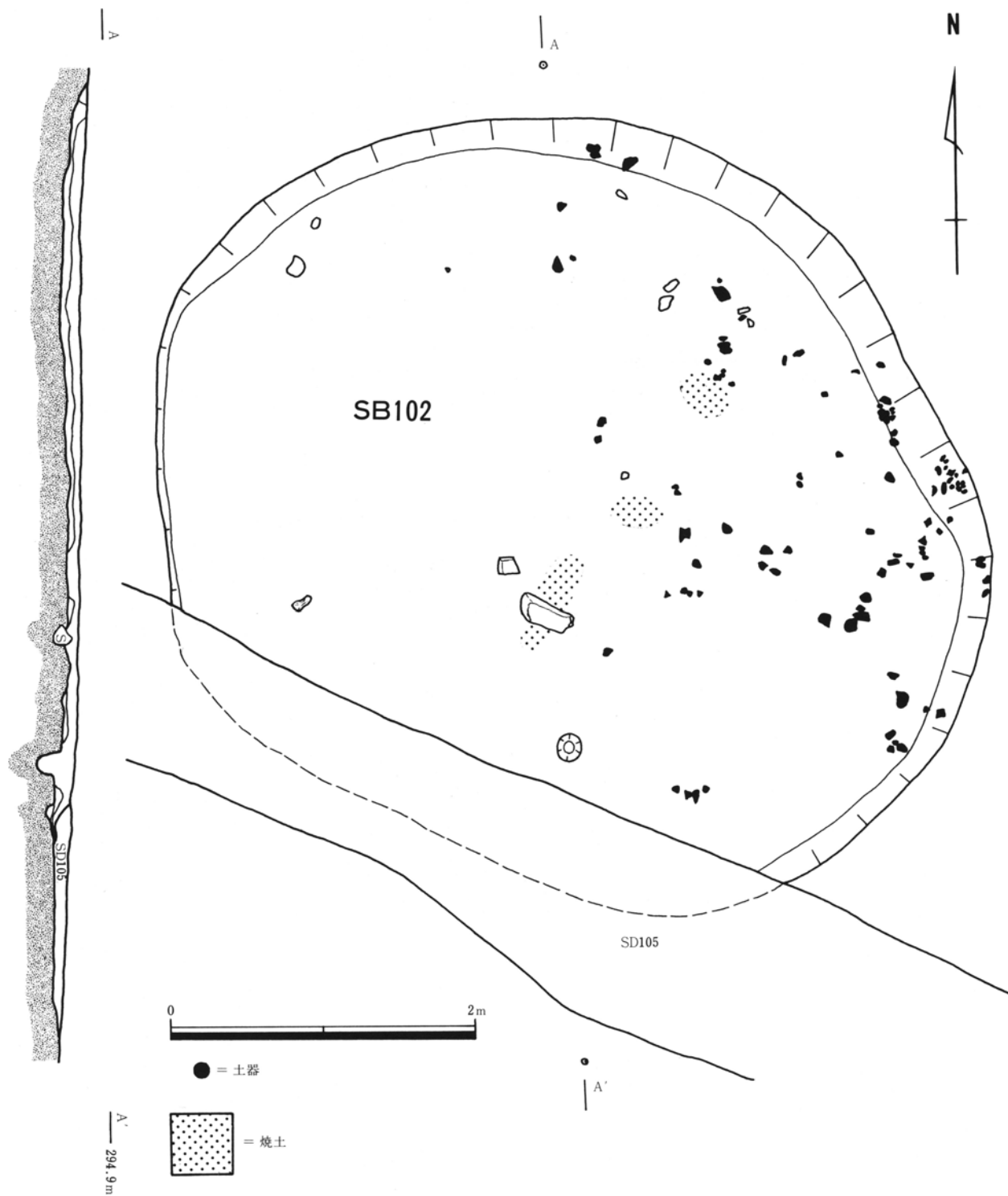
第10図 SK122平面及び断面図



第11図 SK147平面及び断面図



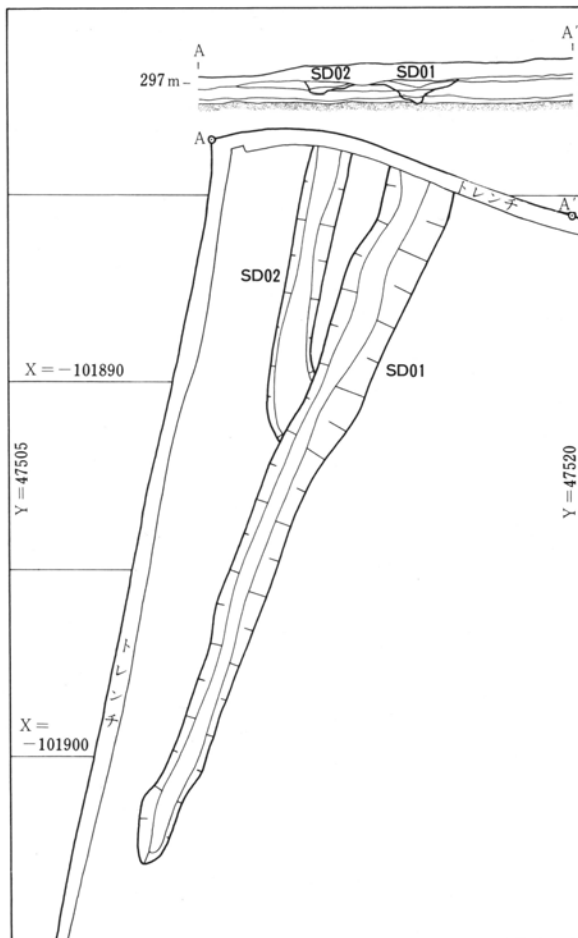
第12図 SX103平面及び断面図



第13図 SB102平面及び断面図

- SB102** 調査区中央東寄りに位置する。検出高は標高294.6mを測り、平面形態は胴張りの隅丸方形を呈し、長径590cm、短径480cm（推定）を測る。長軸線の方位はN-58度-Wを示す。地山を掘り込んで床面としているが、検出段階で明瞭な周溝、柱穴などは見出し得なかった。床面のほぼ中央には焼土を伴う長さ20~40cmの角礫が残存しており、炉縁石の一部ではないかと思われる。このSB102はSD105（時期不明）に切られている。埋土は黒褐色シルトを基調とし、壺の口縁部片（37）、胴部片（38）、甕の口縁部片（58・60、別個体）などの小片が出土している。出土遺物は三河平野部の中期後葉の土器と類似性を持つ。
- SK147** 調査区中央東側に位置する。検出高は標高294.4mを測り、平面形態は楕円形を呈する。長径200cm、短径130cm、深さ14cmを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とし甕の口縁部片（61）が1点出土した。
- SX103** 調査区中央東寄りに位置している、検出高は標高294.9mを測り、平面形態は楕円形に近い隅丸方形を呈する。長径380m、短径280cm、深さ25cmを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とし、壺の頸部片（45）、肩部片（46）、甕の口縁部片（64・65別個体）が出土した。

（３） 歴史時代



第14図 SD01・02平面及び断面図

歴史時代の遺構はやはりA区のみで検出できたが、溝2条を数えるに留まった。

遺構検出面は296.45~294.89mで、基本層序の項で図示した第4層（淡灰褐色シルト）の上部から掘り込まれていた。以下、各遺構について説明する。

SD01

調査区西側北端に位置する。断面形態はゆるやかな谷形を呈し、軸線の方法はN-25度-Eを示す。溝幅90~180cm、深さ60cmを測る。埋土は灰褐色シルトを基調とし、隣接するSD02を切っている。斜面の傾き方向に沿うかたちで延びており、この溝の上部方向には20年程前まで溜池が存在したことから、関連する水利施設の可能性も考えられる。灰釉系陶器碗、天目茶碗の小片が出土している。

SD02

調査区西側北端に位置する。溝幅100~120cm、深さ30cmを測る。埋土は灰褐色シルトを基調とし、SD01に切られている。

第V章 遺物

1 土器

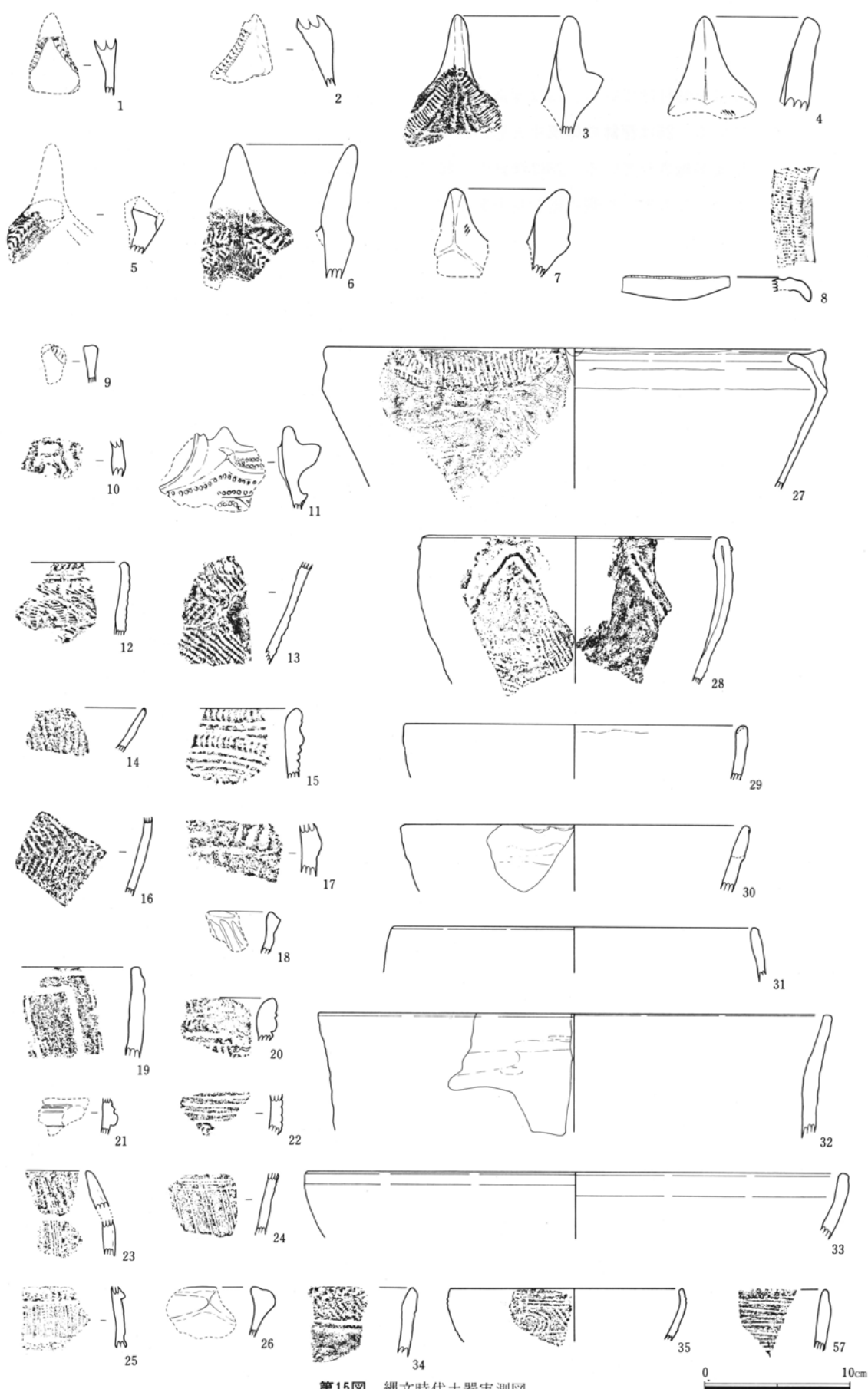
上の平遺跡の出土遺物はA区にのみ確認されたが、遺構の項でも述べたように全体的に密度は希薄で、遺構に伴うものもほとんどみられなかった。時期についても幅がみられ、一括性を持つものは弥生時代の遺構伴出遺物にみられたのみである。土器・陶器については全形を窺い得る資料が少なく、小片がほとんどであった。このために敢えて器種分類を行わず、特徴などから想定し得る時期、器種ごとの説明に留めた。以下、各時代毎に説明する。

(1) 縄文時代

縄文時代の出土土器については出土状態が散漫的で、一括性は認められなかった。調査区全体では北東半分ではほとんどのものが出土している。器種としては深鉢、鉢がみられ、時期は前期から晩期までの各時期のものが出土しているが、中期前半のものが主体を成すかと思われる。また、西日本系と東日本系の土器が共に出土しており、人的・物的交流を考えさせる興味深い資料となっている。

12・13・16は深鉢と思われる土器片である。横位に羽状縄文を施した後、隆帯を貼付け、その上からへら状工具によるきざみを施している。こうした形態上の特徴から、前期中葉の北白川下層Ⅱc式に比定されるものと思われる。10は深鉢と思われる土器片で、粘土紐を貼付け、円形浮文を貼付けている。前期後葉の諸磯式との類似性が窺われる。

8は深鉢の口縁部片と思われるものである。口縁部は強く外反し、波状を成しており、この外反部内側に爪形刺突が施され、中期的様相が窺われる。11は深鉢の口縁部片で、棒状工具による刺突が施されており、中期的様相が窺われる。15・20は深鉢の口縁部と思われる土器片で、粘土紐を貼付けた後爪形文を施し、さらに22も含めて沈線で施文しており、下部は縄文を施しているものと思われる。広い意味で中期前葉の北屋敷式の範疇に入るものと思われる。21は深鉢の口縁部近くの破片と思われ、粘土紐を貼付け半裁竹管による併行沈線を施している。北裏式に伴うものかその後出段階のものであろう。1～7・9は深鉢の口縁部突起片で、先端を「く」の字状に加工した工具で、1～2列方向を変えて施文をしているものや押引き状の施文をしているものがみられる。23は深鉢の口縁部片で、突帯文と竹管状工具による平行線文が縦方向に加えられている。24は深鉢の体部片と思われるもので縦横に条線が施されている。23・24には中期中～後葉の様相が窺われる。27はキャリパー形口縁を持つ深鉢の口縁部片で、口縁部外側の突起の間に押引状の施文をしており、中期的様相が窺われる。18は深鉢の口縁部片と思われるもので、粘土紐による細い



第15図 縄文時代土器実測図

隆帯を貼付けている。19は深鉢の口縁部片と思われ、凹線による縦長の方形区画が施されている。25は深鉢の体部片と思われる土器片で、粘土紐を貼付けた後半裁竹筥によって楕形文が施されている。28は深鉢の口縁・体部片で、口縁部は大きく折り返して成形されており、この内・外側に紐状粘土を山形に貼付け、下部は縄文が施されている。18・19・25・28では施文、形態などに中期的様相が窺われるが、詳しい時期については判別し得ない。

34は深鉢の口縁部片と思われるもので、沈線で区画した口縁部外側に縄文を施している。35は鉢の口縁部片と思われるもので、ヘラ状工具による沈線で文様が施されている。34・35ではいずれも後期的様相が施文、形態などに窺われる。

57は深鉢の口縁部片で、口縁部外側には横方向に条痕文が施されている。晩期の条痕文系土器と思われるが、詳しい時期については判別し得ない。

遺構からの伴出遺物としては、7・9がS K 145、13がS K 138、18がS K 197、20・24がS K 171、30がS K 101、35がS K 146からの出土である。

(2) 弥生時代

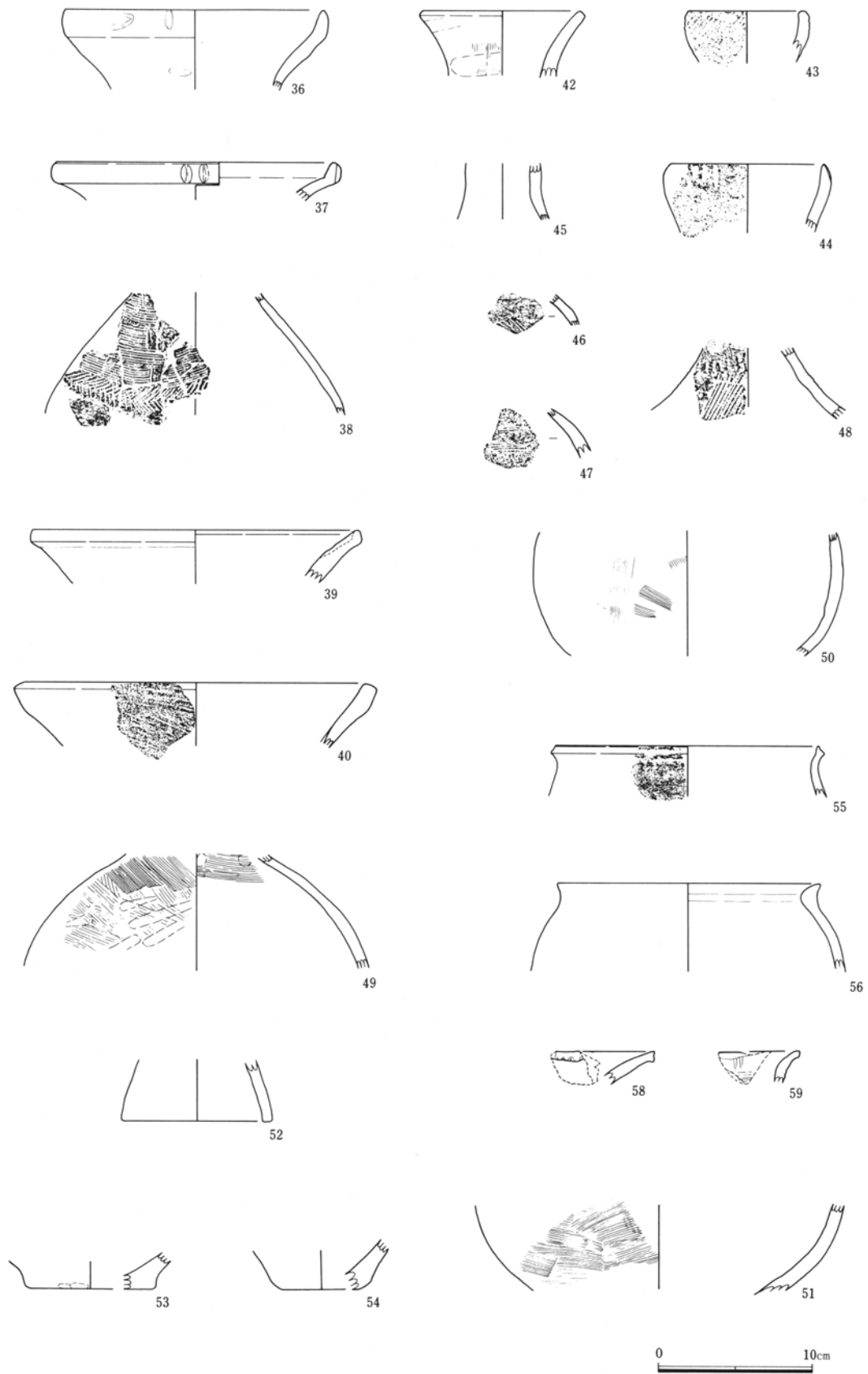
弥生時代の出土土器については、縄文時代同様出土状態が散漫的であるが、S B 102周辺に集まる傾向が窺われた。器種としては壺、甕、鉢がみられるが、小片が多く、中期に属するものが主体を成す。

36～40・42～47・53は壺と思われる土器片である。36・37は受け口状の口縁を持つ広口壺の口縁部片である。37には口縁部外面に棒状浮文が貼付けられている。38は壺の体部片で、ヘラ状工具による擬流水文を縦に破線状に施した後、そこを起点として横方向に櫛描直線文を施している。体部最大径近くにはヘラ状工具によって羽状文が施されている。42はラッパ状に開く口縁を持つ細頸壺の口縁部片で、頸部にかかる部分には縦方向にハケ目調整が施されている。43は細頸壺の口縁部片で、口縁部外側には櫛歯刺突が施され、器面はハケ目調整の後、ナデ調整が施されている。48はラッパ状に開く口縁を持つ細頸壺の体部片で、ハケ目調整した後、頸部に櫛歯刺突を施している。43・48のような櫛歯刺突は擬縄文として施された可能性が窺える。

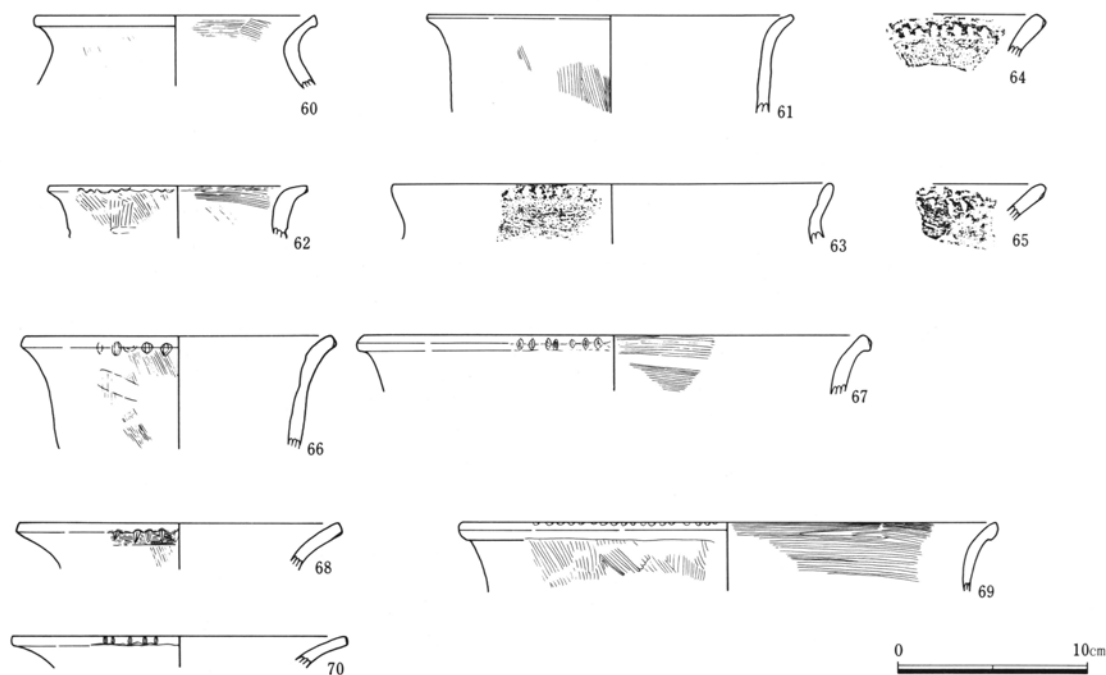
55は鉢の口縁部と思われる土器片で、口縁部外側は面取りが成されており、ここに沈線状の凹みが付けられている。口縁部内側の凹みから外側にかけては横方向に丁寧なナデ調整が行われたのち、赤彩が施されている。

58～70は甕と思われる土器片である。全体的には頸部がゆるく外反し、口縁端部に刻み目を施し、ハケ目調整が施されているものが多くみられ、69のように口縁部があまり外反しないで折り返されているものもある。後期にみられる「く」の字状の口縁部を持つものはほとんどみられない。

出土土器には、天竜川水系上流部を占める長野県側からの影響はほとんど窺われず、下流部を占める遠江・三河地方の影響が色濃い。中期後葉になると三河ではハケ目調整の甕が多くなるが、これは尾張の貝田町式系統が三河に入ってくることに伴う現象である。こ



第16図 弥生時代土器実測図 (1)



第17図 弥生時代土器実測図 (2)

うした点を考え合わせると、これらの土器は尾張の高蔵式、三河の長床式、遠江の白岩式併行期にあることは確実で、ことに擬流水文をもつ土器は遠江地方との関連を示しており注目される。

遺構からの伴出遺物としては、37・38・58・60がS B 102、61がS K 147、42・46・64・65がS X 103からの出土である。

2 石器

上の平遺跡から出土した石器は、土器に比べると残存率が高いためか相対的に多くみられ、出土地点も調査区全体にわたった。器種としては打製石斧、磨製石斧、石鏃、鉤形石器、スクレイパー、石錐、石刀、石匙、叩き石、凹石、磨石などがみられた。

これらの石質については、緑色片岩、結晶片岩、変塩基性岩、玄武岩、珪岩、安山岩、ガラス質石英安山岩、チャート、黒曜石、凝灰岩、砂質凝灰岩、溶結凝灰岩、凝灰質砂岩、泥岩、凝灰質泥岩、頁岩、輝緑岩、片麻岩、砂岩などがみられた。特に調査地周辺で「コンコ（粉）石」と呼ばれている砂岩は、検出段階では土器片との識別が難しかった。なお、石質については、当センターの永草康次、榎 真美子が鑑定を行った。

101～125が打製石斧である。総出土点数は62点で全体の40.9%にあたり、最も多い比率を示す。形態的には短冊形と撥形に分けられ、分銅形はみられない。形態が判別可能な21点のうちでは、短冊形が12点、撥形が9点を占める。101～106・108～113は短冊形の打製石斧である。石質は緑色片岩が多く59%を占め、結晶片岩も含めると片岩系が72%に達する。大きさは長さ10～13cm、幅3～5cm、厚さ1～2cm、重さ180～200gのことが多い。側面観は縦断面が蒲鉾状を呈し、側縁部が直線状を成すものが多く、121・123のような反

り身のものは僅かである。104・105・112・115・116のように、刃部に摩耗痕が確認できるものは少ない。

145～152は磨製石斧である。総出土点数は12点で全体の8.1%を占める。形態的には明瞭な定角式はみられず、乳棒状が多い。石質は変塩基性岩が最も多く全体の58.3%を占める。150・152には割れ口に敲打痕が認められ、欠損後もくさびなどに再利用された可能性が窺われる。

126～143は石鏃である。総出土点数は18点で全体の12.1%を占める。形態的には凹基、平基、凸基・有茎、無茎のものがみられ、その内訳は凹基8点、平基3点、凸基3点、有茎5点、無茎13点であった。石質は黒曜石が最も多く、44.4%を占める。通称「下呂石」と呼ばれるガラス質石英安山岩は、水系の違いからか2点のみ(11.1%)である。

144は鉤形石器である。1点のみ出土していて、形態上は縦型石匙のつまみ部を欠くものとも捉えられそうであったが、断面形態が棒状を呈していたため区別した。石質は黒曜石である。

153～161はスクレイパーである。総出土点数は13点で全体の8.7%を占め、使用痕のある剥片等も含めると43点となり全体の28.9%を占める。石質については13点中で凝灰岩が最も多く、全体の38.6%を占め、43点中でも全体の48.8%が凝灰岩であった。

162は礫石錘で、総出土点数は3点である。偏平な河原石の長軸端部を打ち欠いている。打ち欠き部の幅は上部が8mm、下部が6mmで、打ち欠き間の最短距離は38mmを測る。石質はいずれも緑色片岩である。

163は石刀で1点のみ出土している。頭部は欠損しており残存部から内反りの状況は判断し得ない。石質は緑色片岩である。

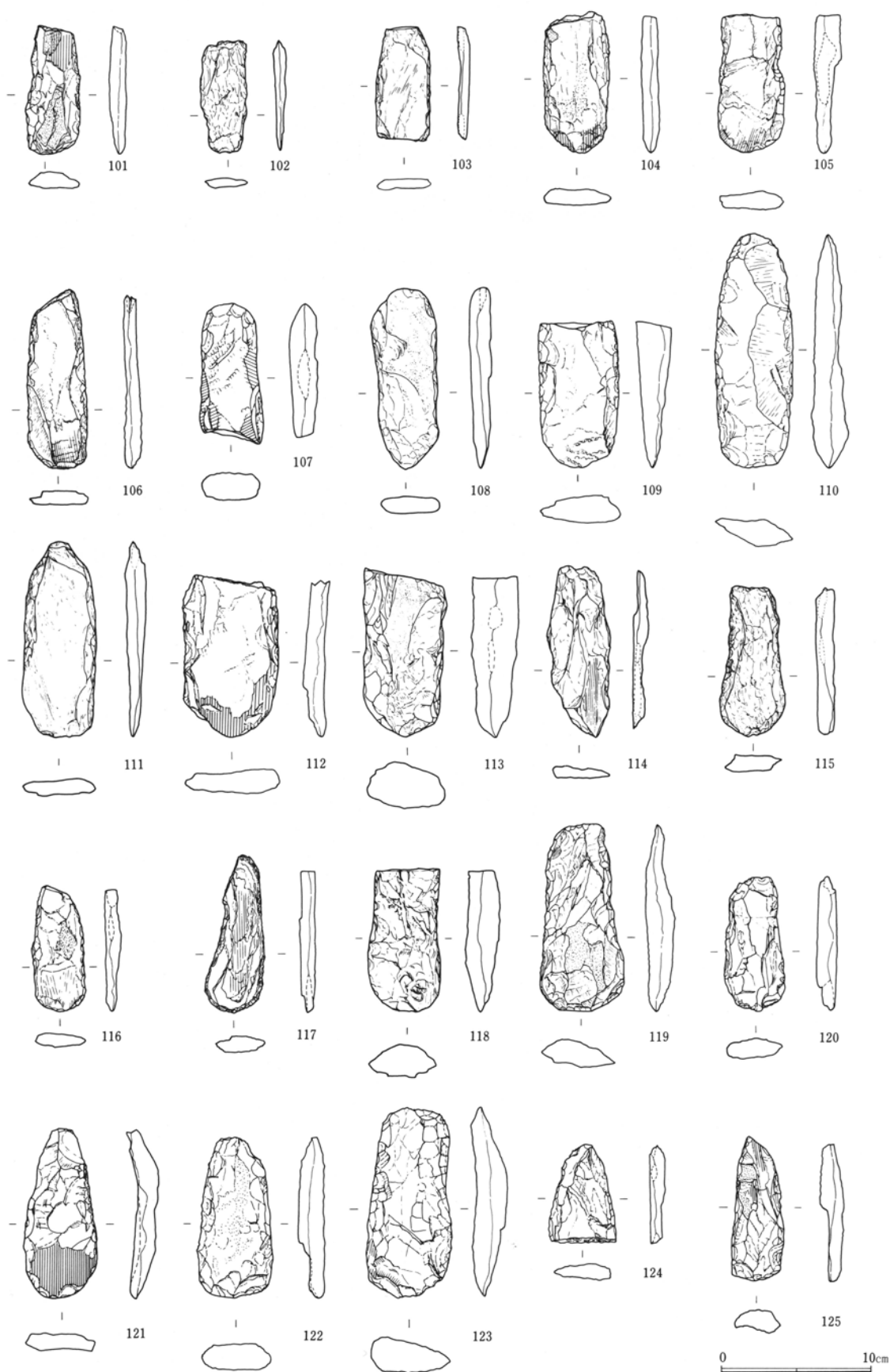
164は石匙で1点のみ出土している。形態としては横型で、つまみの位置はやや右寄りである。石質は凝灰質泥岩である。

165は叩石で1点のみ出土している。上端部は敲打によってつぶれており、石質は砂岩である。

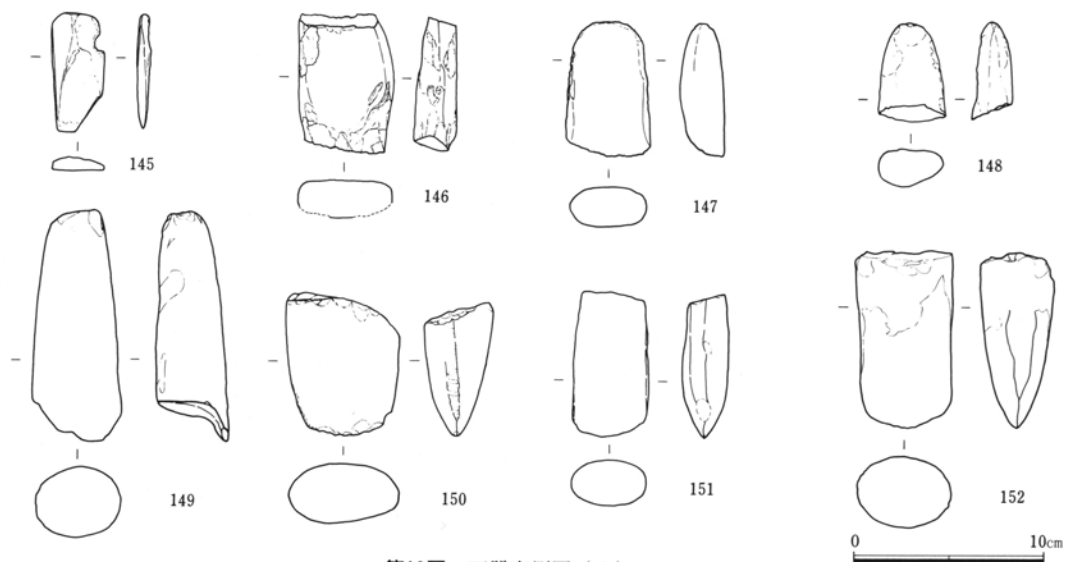
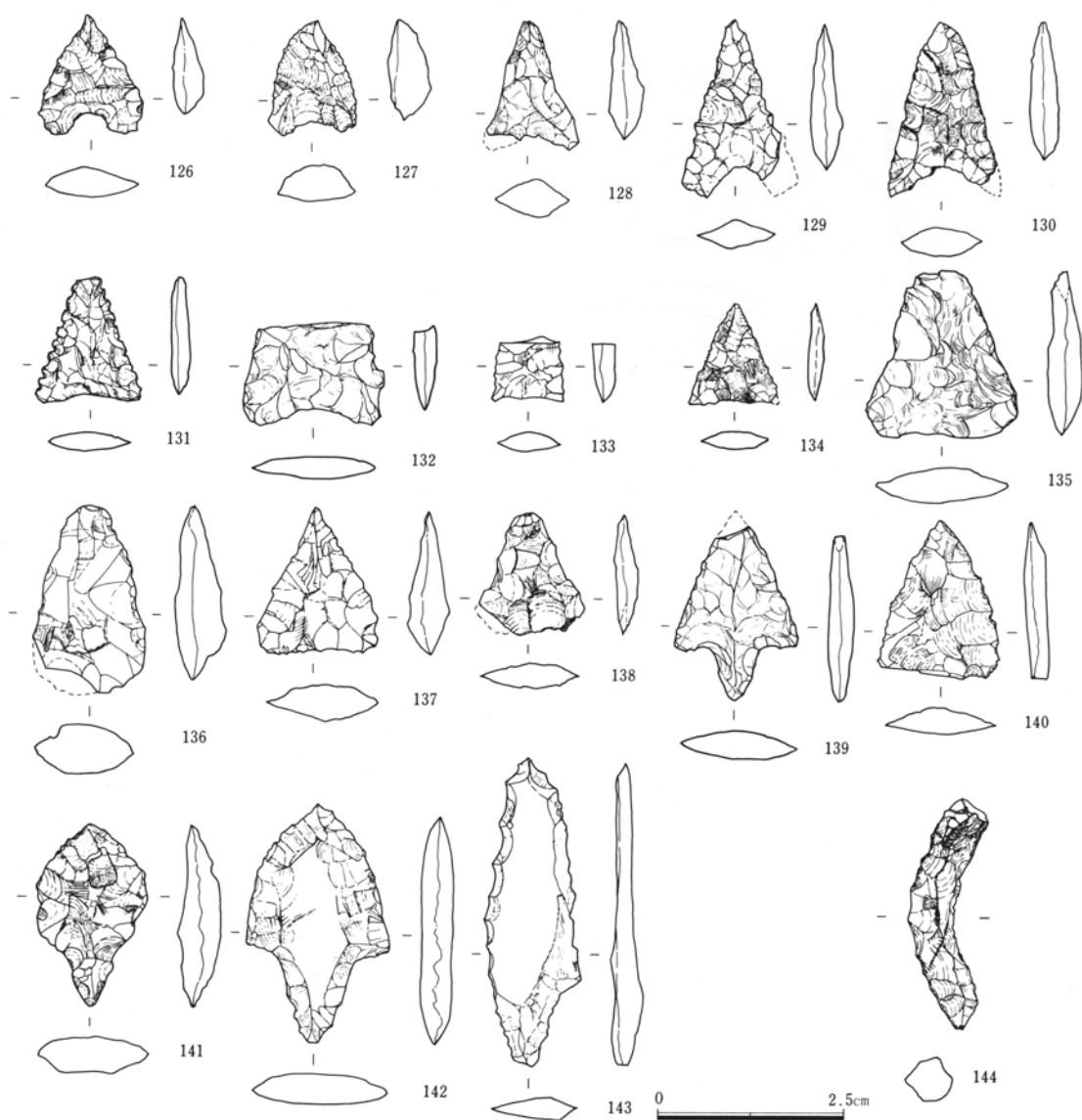
167は磨石で1点のみ出土している。素材としての礫に手を加えず磨石として使用したと思われ、石質は安山岩である。

166・168～171は凹石である。総出土点数は6点で全体の4%を占める。敲打の結果生じたものと思われる凹みが片面1ヶ所のもの、数ヶ所のもの、両面にあるもの、側面にもあるものがみられた。石質は6点中4点が凝灰岩であった。

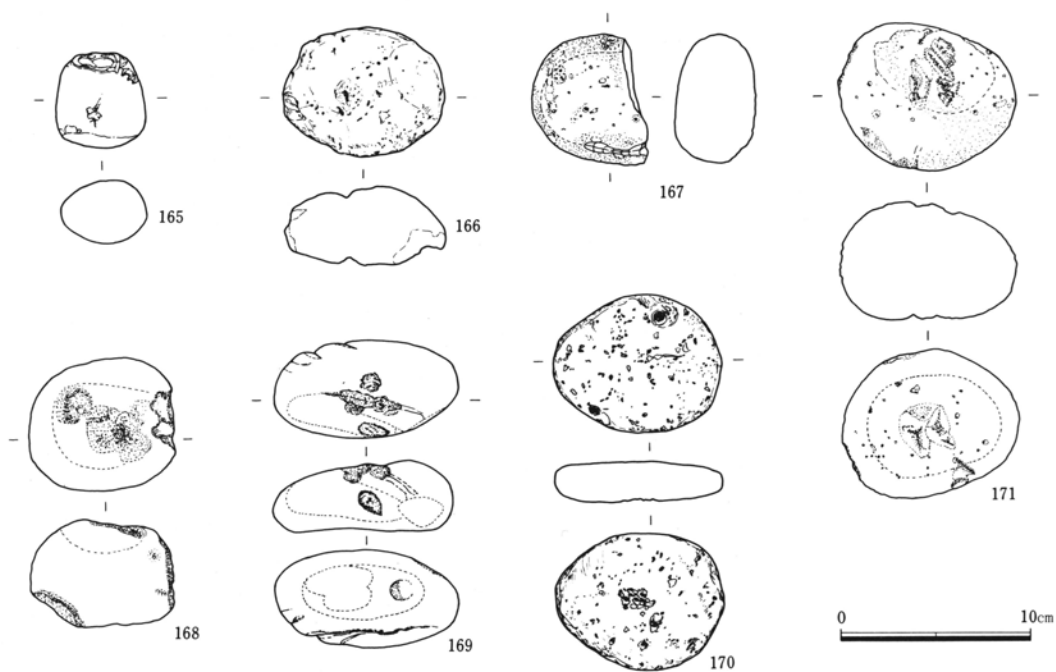
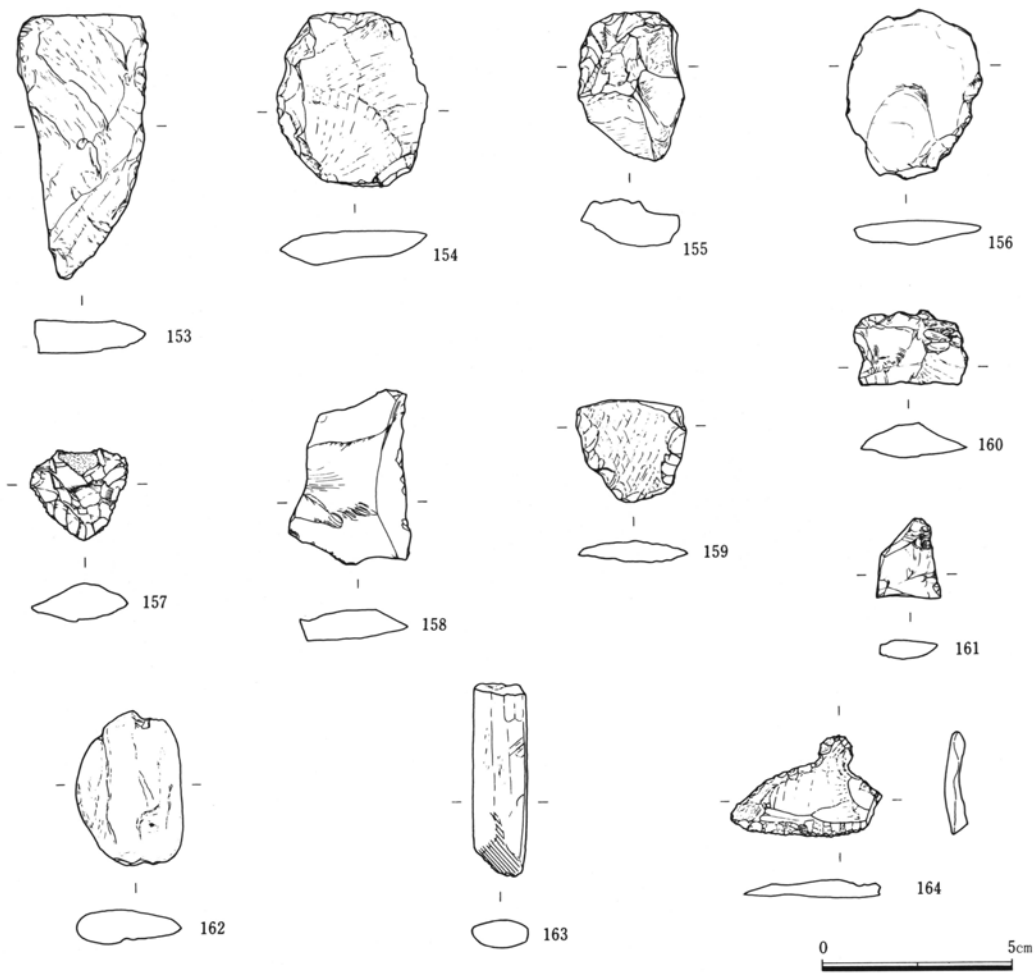
本遺跡出土の石器は、推定できる土器の時期から考えると、縄文時代前期から弥生時代中期に至るまでの長い時間幅に収まる。しかし、縄文・弥生土器及び石器ともに遺構からの伴出例が少ないため時期の推定は困難となっている。ただし、弥生時代中期後葉と思われる遺構(SB102・SX103)から打製石斧(石鏃)、石鏃、スクレイパーが出土していることは、生活の一端を示唆する上で興味深い。遺構からの伴出遺物は、106がSK90、115がSB101、119・127・159がSB102、113・140がSX103、147がSD02である。



第18図 石器実測図(1)



第19図 石器実測図(2)



第20図 石器実測図（3）

品 種	数 量	%
打製石斧	61	40.94
磨製石斧	12	8.05
石鏃	18	12.08
石刀	2	1.34
鉤形石器	1	0.67
凹石	6	4.03
叩石	2	1.34
石匙	1	0.67
礫石錘	2	1.34
切目石錘	1	0.67
スクレイパー	43	28.75
合 計	149	99.98

第 2 表 石器組成表

材 質	数 量	%
緑色片岩	36	59.02
玄武岩	2	3.28
変塩基性岩	4	6.56
安山岩	3	4.92
凝灰岩	5	8.2
結晶片岩	8	13.11
砂質凝灰岩	2	3.28
頁岩	1	1.64
合 計	61	100.01

第 3 表 打製石斧材質組成表

材 質	数 量	%
変塩基性岩	7	58.33
緑色片岩	2	16.67
頁岩	1	8.33
砂質凝灰岩	2	16.67
合計	12	100

第 4 表 磨製石斧材質組成表

材 質	数 量	%
黒曜石	8	44.44
溶結凝灰岩	1	5.56
珪岩	1	5.56
凝灰岩	3	16.67
凝灰質泥岩	2	11.11
ガラス質石英安山岩	2	11.11
チャート	1	5.56
合 計	18	100.01

第 5 表 石鏃材質組成表

材 質	数 量	%
緑色片岩	2	100
合 計	2	100

第 6 表 石刀材質組成表

材 質	数 量	%
黒曜石	1	100
合 計	1	100

第 7 表 鉤形石器材質組成表

材 質	数 量	%
凝灰岩	4	66.67
片麻岩	1	16.67
輝緑岩	1	16.67
合 計	6	100.01

第 8 表 凹石材質組成表

材 質	数 量	%
砂質凝灰岩	1	50
砂岩	1	50
合 計	2	100

第 9 表 叩石材質組成表

材 質	数 量	%
凝灰質泥岩	1	100
合 計	1	100

第 10 表 石匙材質組成表

材 質	数 量	%
緑色片岩岩	3	100
合 計	3	100

第 11 表 石錘材質組成表

材 質	数 量	%
凝灰岩	21	48.84
黒曜石	3	6.98
チャート	1	2.33
安山岩	2	4.65
緑色片岩	2	4.65
頁岩	9	20.93
ハンレイ岩	1	2.33
泥岩	1	2.33
溶結凝灰岩	2	4.65
凝灰質泥岩	1	2.33
合 計	43	100.02

第 12 表 スクレイパー材質組成表

第Ⅵ章 自然科学的分析

1 土器の胎土分析

本節の記述は、分析を依頼した㈱パリオ・サーヴェイによるものである。

(1) 分析の目的

当社では、これまでに愛知県下で出土する土器の胎土分析を多数行い、愛知県における土器胎土の地域性について考察を行ってきた。しかし、いまだに愛知県全域についての資料を得るには至っておらず、その空白地域は多い。今回の試料の出土地域は、愛知県の東端部、静岡県―長野県境地域であり、当社胎土分析の空白地域に相当する。本分析は、まずこの地域における土器胎土の状況を把握し、胎土の材料となった砂や粘土の採取地の地質学的背景を考慮しながら胎土の地域性について考察する。また、今回の試料は、縄文土器と弥生土器があり、その器種も深鉢や壺、甕等が混在することから、これらの分類と胎土との関係についても考える。

(2) 試料

試料は、愛知県東栄町、豊根、津具村、設楽町、旭町、静岡県佐久間町、水窪町の各町村から出土した縄文および弥生土器合計60点である。これらの試料は、発掘調査担当者により試料番号1～60までの試料名がつけられている。各試料の出土した町村名と遺跡名、時期、器種および表面観察結果などを第2表に示す。

(3) 分析方法

これまで、愛知県の胎土分析では、一貫して胎土中の砂分の重鉱物組成を胎土の特徴としてきた。本分析では、これに加えて軽鉱物組成についても調べ、胎土の特徴をより多面的にとらえる試みを行う。処理方法は以下の通りである。

土器片約10～15gを鉄乳鉢を用いて粉碎し、水を加え、超音波洗浄装置により分散、250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm―1/8mmの粒子をテトラブromoエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱物および軽鉱物を偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方から落斜光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉱物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。鉱物の同定粒数は重鉱物、軽鉱物それぞれ250個を目標とし、その粒数％を算出し、グラフに示す。同定粒数が100個未満の試料については粒数％を求めることはしない。

(4) 分析結果

1) 重鉍物分析

鉍物の同定粒数が250個未満のものは27点あり、このうち、100個に満たない試料が17点あった。これら17点の試料の組成は、グラフにはせず、考察の対象とはしない。これらの試料は、もともと分析量が特に少なかったため、十分な重鉍物量を得ることができなかったと考える。ただし、その中の試料番号11、29、41、48の4点は、処理した量が10g以上あり、とくに少ないわけではないことから、胎土中の砂分の重鉍物量がもともと少なかったといえる。すなわち、これらの試料は重鉍物の少ないことが胎土の特徴と考えることができる。以下に各町村、遺跡ごとにその特徴を述べる。なお、全試料の胎土の重鉍物組成を表2、図1～3に示す。

①東栄町（上の平遺跡を除く試料番号1～13まで）

坂甫遺跡の試料番号5、11、向平遺跡の試料番号6および寄近遺跡の試料番号10の4点は、同定粒数100個未満であった。

a) 引田遺跡

7点の試料はどれも縄文あるいは縄文晩期の深鉢であるが、組成的には次の4種類に分類することができる。

・試料番号1、3

「その他」が50%以上を占め、カンラン石、斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・ジルコン・ザクロ石・不透明鉍物の多種類の鉍物を微～少量含む。

・試料番号2、4、7

角閃石・黒雲母・ザクロ石を主体とし、少量のジルコン・不透明鉍物を含む。

・試料番号8

黒雲母を主体とし、少量の斜方輝石・角閃石・ザクロ石を伴う。

・試料番号9

緑レン石が最も多く、これに角閃石・黒雲母・ザクロ石を伴い、少量の単斜輝石やジルコンなどを含む。

b) 寄近遺跡

組成を出すことのできた試料は、試料番号12、13の2点のみである。どちらも弥生土器であるが、組成はやや異なる。

・試料番号12

「その他」が80%以上を占める。同定された鉍物は、微量のカンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・不透明鉍物である。

・試料番号13

「その他」が50%以上を占めるが、同定された鉍物では斜方輝石が多く他に単斜輝石・角閃石・黒雲母・ジルコン・不透明鉍物などを伴う。

②豊根村及び津具村

豊根村の遺跡は宮嶋遺跡のみ、津具村の遺跡は大根平遺跡のみである。このうち、宮嶋遺跡の試料番号16と23の2点および大根平遺跡の試料2点は、組成を求めることができなかった。したがって、以下の試料は全て豊根村宮嶋遺跡の試料である。

- ・試料番号14、18～21、27

黒雲母を主体とし、少量の角閃石とザクロ石を伴う。

- ・試料番号15、24～26

「その他」が非常に多く、80%以上を占める。同定された鉱物は斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母である。

- ・試料番号17

斜方輝石を主体とし、少量の単斜輝石・角閃石などを伴う。

- ・試料番号22

黒雲母を主体とするが、少量の単斜輝石とジルコンを伴い、角閃石を全く含まないことで上記試料番号14などの試料と区別される。

- ・試料番号28

角閃石と黒雲母・ザクロ石の3鉱物を主体し、少量の単斜輝石を伴う。

③佐久間町および水窪町

5点の試料は全てよく類似した組成を示す。すなわち、黒雲母を主体とし、少量の角閃石と少～微量のジルコンとザクロ石を伴う。

④設楽町

試料が全部で8点あり、各遺跡1点ずつの試料である。このうち欠田遺跡の試料番号41と中向遺跡の試料番号42は、組成を求めることができなかった。

- ・試料番号36

「その他」がほとんどで90%以上を占める。

- ・試料番号37

黒雲母が80%を占め、他にほとんど鉱物を含まない。

- ・試料番号38～40、43

黒雲母を主体とし、少～微量の角閃石・ジルコン・ザクロ石を伴う。

⑤旭町

上万場遺跡から出土した試料7点のみである。そのうち試料番号48と50の2点については、組成を求めることができなかった。

- ・試料番号44～46

「その他」が50～60%を占め、同定された鉱物は、角閃石・黒雲母・ジルコン・ザクロ石・不透明鉱物である。

- ・試料番号47、49

斜方輝石を主体とし、中～少量の単斜輝石と少量の角閃石・黒雲母・不透明鉱物を伴う。

⑥東栄町

試料は全部で10点であるが、このうち試料番号54、56、57、59、60の5点については組成を求めることができなかった。

・試料番号51～53、55

「その他」が非常に多く、60～80%を占めるが、同定された鉱物は、斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母などである。

・試料番号58

「その他」が多く、70%近くを占めるが、同定された鉱物はほとんどが緑レン石である。

2) 軽鉱物分析

重液分離により分離された軽い粒子の中には、分離されずに残った土器片の粒子や不明粒（一括して「その他」とする）と長石・石英の2種類の鉱物を同定することができた。これら3者の割合は試料によってさまざまであるが、全体的な傾向として石英または「その他」多く、長石は少ない。ただし、試料番号22・27・28・36などは比較的長石を多く含む。

3者の割合と重鉱物組成との間には、それほど厳密な相関関係はない。これは、上記の長石の多い試料の重鉱物組成が類似しないことをみてもわかる。また、重鉱物が100粒未満であった試料も軽鉱物は豊富にあった。ただし、部分的には、次のような対応関係もうかがえる。試料番号18～21の重鉱物組成は、すべて黒雲母を主体とする組成であるが、その中でザクロ石やジルコンをほとんど含まない試料番号20は他の試料に比べて石英の量比が高く、ジルコンと単斜輝石を少量含む試料番号22は長石が多い。また、試料番号24～26は「その他」が非常に多い重鉱物組成を示すが、軽鉱物も「その他」の多い傾向が認められる。さらに、試料番号48・50・59・60などは、重鉱物が100個未満であるのに比べて石英の量が非常に多い。

(5) 考察

1) 土器の胎土と時期・器種との相関性について

図1～3では、各試料の組成の横に時期、器種、部位を示したが、これらの図から胎土との相関性を認めることはできない。すなわち、同一遺跡における同じ時期の土器の間で胎土の組成が異なっていたり（例えば引田遺跡の試料番号1～3・7～9の縄文晩期の土器や上万場遺跡の試料番号44～47の弥生中期の土器など）、異なる時期の土器が類似する組成を示す（宮嶋遺跡試料番号18・19の弥生土器と同遺跡試料番号27の縄文晩期の土器など）。また器種と胎土との相関性もほとんど認められない。

2) 土器胎土の地域性について

本分析の対象となった地域は、愛知県東北端部のいわゆる東三河地域になるが、これまでに分析を行った東三河地域の遺跡は豊川の中下流域であることから、分析資料のない地域であった。本分析では、黒雲母を主体とし、少量のザクロ石を伴う組成（ここでは仮に

「黒雲母型」と呼ぶ)の試料が多く、これまで三河地域に多くみられた「角閃石型」の試料がほとんど認められないこと、また、これまで尾張地域産の土器であることの指標としてきた「両輝石型」の胎土の土器が少数ではあるが認められたことが大きな特徴である。さらに、「その他」が非常に多い胎土が存在することも特徴であるといえる。これらの特徴を本分析対象地域(ここでは便宜上東北三河地域とよぶ)の胎土の地域性として捉ええることが可能ではないかと考える。

これまで分析された豊川中下流域の東三河地域の土器胎土の状況は「角閃石型」が多数を占めていたが、その中に少数の「黒雲母型」の胎土も認められていた。しかもこれらの「黒雲母型」の土器の出土地は、豊川市や豊橋市よりも新城に偏る傾向があった。本分析の結果を合わせて考えれば、これらの少数の「黒雲母型」の土器は、東北三河地域との関連性を示していることが考えられる。

さらに、本分析地域の中の狭い地域すなわち町村単位でも、次のようなある程度まとまった傾向をつかむことができる。東栄町の試料では、上の平遺跡と他の遺跡とで胎土の傾向が異なる。上の平遺跡の試料の特徴は、「その他」が非常に多いことと少量の両輝石・角閃石・黒雲母である。これに対し、東栄町の他の遺跡の試料は多めの「その他」と少～中量の角閃石・黒雲母・ジルコン・ザクロ石である。また、東栄町全体では「黒雲母型」は少数になる。さらに緑レン石を中量含む胎土は、今回の試料では他にみられず、これまでの愛知県全体の胎土と比べても珍しい。豊根村、津具村、佐久間町、水窪町、設楽町では「黒雲母型」が多数を占める。少数あるものとして試料番号17の「両輝石型」や試料番号24～26・36の「その他」の非常に多い胎土がある。旭町では、多めの「その他」と少量の角閃石・黒雲母・ジルコン・ザクロ石・不透明鉱物からなる胎土と「両輝石型」の胎土とが混在する。今回の試料では、どちらの胎土が多いということはない。

ところで、本分析対象地域は領家カコウ岩帯および領家変成岩帯さらに第三紀火山岩である設楽層群の分布地域であり、また豊根村には領家帯の塩基性岩帯も分布する。上記のように狭い地域内での胎土の鉱物組成の状況が異なるのは、このような比較的複雑な地質学的背景を反映していると考えられる。このことは、土器の材料には出土地周辺の砂や粘土が使われたことを示唆している可能性がある。

また、これまで尾張地域の指標としてきた「両輝石型」の胎土が、本地域で少数にせよ認められたことは、注目すべき事実である。これまで「両輝石型」の主体となっている両輝石の由来については、自然堆積物との比較検討がされておらず、尾張地域においてもその由来は確かめられていない。また、本地域では、両輝石の由来として設楽層群の火山岩を考えることができる。したがって、本地域における「両輝石型」の土器が、必ずしも尾張地域からの搬入品であるとはいえない。今後は、本地域および尾張地域の自然堆積物の分析を進めることにより、「両輝石型」の地域指標としての確実性も検討しなければならない。

3) 胎土分析における軽鉱物の分析の展開について

本分析では、これまでに調べることのなかった胎土中の軽鉱物組成を算出した。結果は前述のように特に有意なまとまりも認められず、また重鉱物組成とは部分的に相関性も認められるが、高い相関性とはいえない。このように現段階では、軽鉱物分析は胎土分析にあまり有効なデーターを提供するとは思えない。これは、本分析において同定される軽鉱物を石英と長石という分類にしたことも、データーの有効性を低くしていると考えられる。今後、軽鉱物分析での有効性を向上させるとすれば、長石の細分を行うことが必要になる。さらに、軽鉱物分析で火山ガラスが検出されることがあれば、胎土の由来を考える上で有効な場合もある。ただし、これを正確に行うためには、鉱物粒の変質が少ないことや薄片作製が必要なことなどのさまざまな条件が付帯する。胎土分析における軽鉱物分析については、まだ多くの検討が必要と考えられる。

ネガ番号	試料番号	鉱物	写真番号
1	2	重鉱物	1
4	8	重鉱物	2
5	9	重鉱物	3
7	1 4	重鉱物	4
9	2 5	重鉱物	5
1 2	3 1	重鉱物	6
1 3	3 6	重鉱物	7
1 5	3 7	重鉱物	8
1 7	4 4	重鉱物	9
1 9	4 7	重鉱物	1 0
2 1	5 3	重鉱物	1 1
2 4	5 8	重鉱物	1 2
2 5	1	軽鉱物	1 3
2 7	2 5	軽鉱物	1 4
2 9	3 6	軽鉱物	1 5
3 1	5 9	軽鉱物	1 6

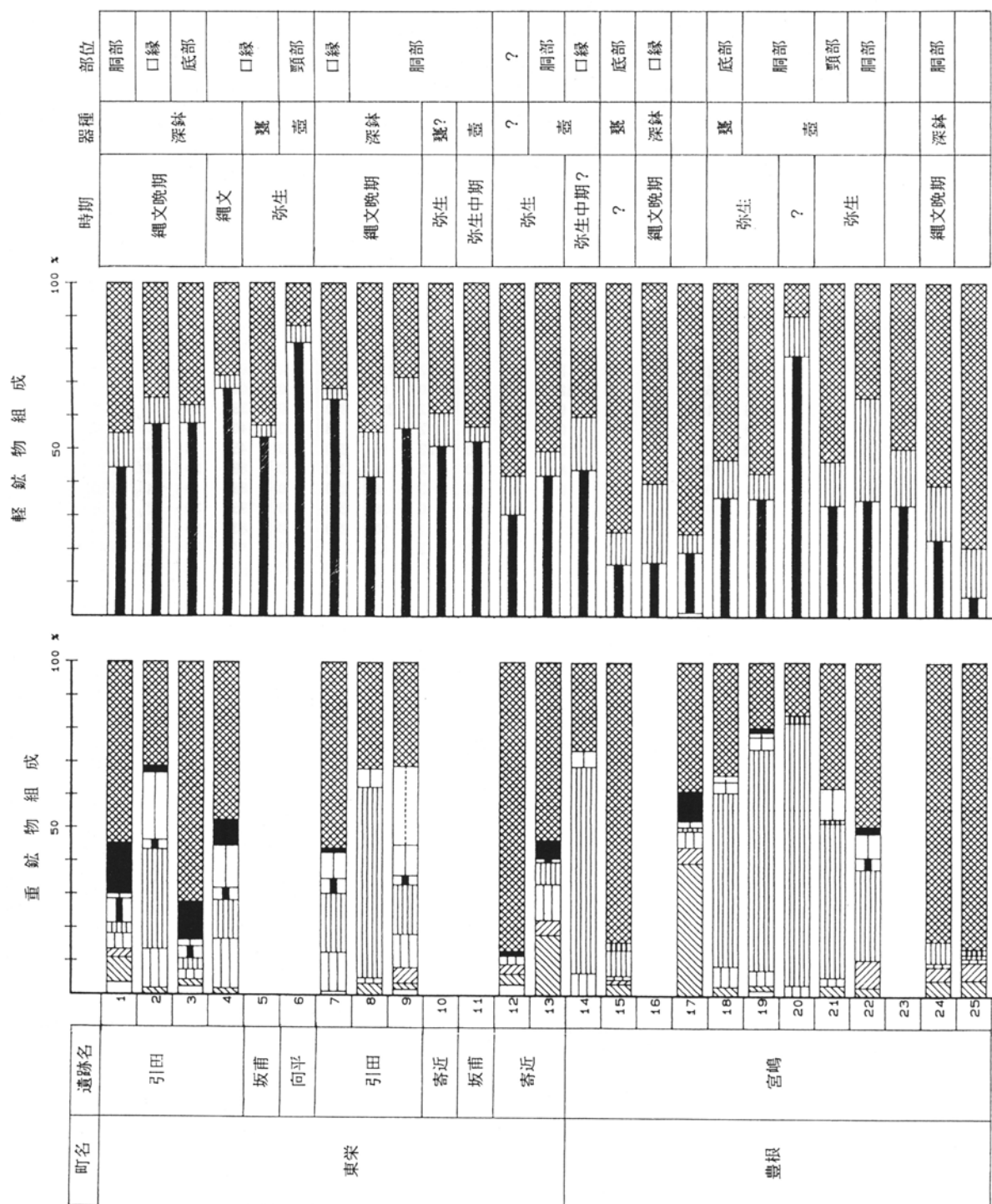
第13表 胎土中の重・軽鉱物顕微鏡写真（図版21～23図）ネガ説明表

試料番号	料 号	町 村 名	遺 跡 名	時 期	器 種	部 位	水 系		
1	2	東 栄	引田 (月)	縄文晩期	深 鉢	胴部	天竜川		
3	4			縄 文		口縁部			
5	6		坂甫 (月)	弥 生	甕	口縁部			
7	8		向平 (月)		壺	口縁部			
9	10		引田 (月)	縄文晩期	深 鉢	胴部			
11	12		寄近 (本郷)	弥 生	甕 ?	胴部			
13	14		坂甫 (月)	弥生中期	壺	胴部			
15	16		寄近 (本郷)	弥 生	?	?			
17	18	豊 根	宮嶋 (坂宇場)	弥生中期?	壺	胴部			
19	20			?	甕	口縁部			
21	22			縄文晩期	深 鉢	底口			
23	24					底口			
25	26			弥 生	甕	胴部			
27	28			?	壺	胴部			
29	30			弥 生		頸部			
31	32			縄文晩期	深 鉢	胴部			
33	34			縄文晩期	深 鉢	胴部			
35	36					胴部			
37	38			津 具	大根平 (中口)	弥生中期		壺	胴部
39	40			佐久間	佐久間 ^A (佐久間)	縄文晩期		深 鉢	頸部
41	42	佐久間 ^B (佐久間)	五貫森		底口				
43	44	半場 (半場)	水神平		胴部				
45	46	水 窪	向市場 (向市場)	五貫森	胴部	豊 川			
47	48	佐久間	半場 (半場)	水神平	胴部				
49	50	設 楽	居立 (田口)	弥生後期	壺		胴部		
51	52		神沢谷 (豊邦)	縄文晩期	深 鉢		口縁部		
53	54		笹平 (小松)				胴部		
55	56		大名倉 (大名倉)				胴部		
57	58		一の橋 (田口)				胴部		
59	60		欠田 (荒尾)				胴部		
61	62		中向 (神田)			胴部			
63	64		マサノ沢 (小松)	胴部	胴部				
65	66	旭	上万場 (浅谷)	弥生中期	壺	頸部	矢作川		
67	68				大 鉢	胴部			
69	70				壺	胴部			
71	72			甕	胴部				
73	74			縄文晩期	深 鉢	胴部			
75	76	東 栄	上の平 (中設楽)	弥 生	壺	頸部	天竜川		
77	78				甕	頸部			
79	80				壺	胴部			
81	82				壺 ?	胴部			
83	84				壺	胴部			
85	86				壺	胴部			
87	88				甕	胴部			
89	90				縄文晩期	深 鉢		胴部	

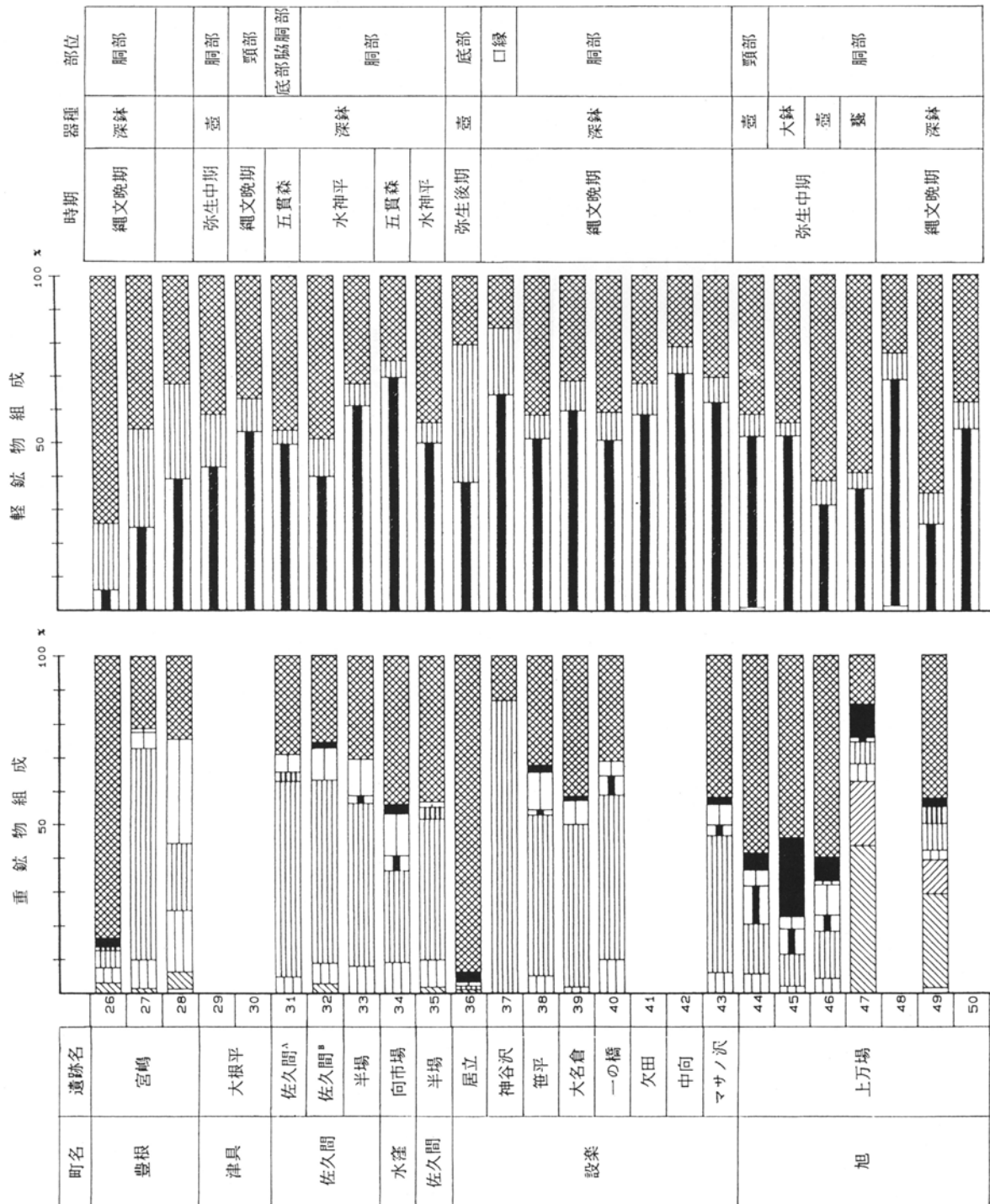
第14表 胎土分析試料一覧表

試料 番号	重 鉱 物 組 成													軽 鉱 物 組 成				
	カン ラン石	斜 方輝石	単 斜輝石	普 通角閃石	黒 雲母・ 緑色	黒 雲母・ 褐色	ジル コン	ザ クロ石	緑 レン石	電 気石	不 透 明 鉱物	そ の 他	同 定 鉱物 粒 数	火 山 ガラ ス	石 英	長 石	そ の 他	同 定 鉱物 粒 数
1	7	14	5	9	5	1	14	3	0	0	29	105	192	0	111	25	114	250
2	1	5	1	29	75	0	7	51	0	1	5	75	250	0	143	20	87	250
3	6	5	1	7	8	0	9	5	1	0	27	172	241	0	144	14	92	250
4	1	5	0	37	29	0	9	32	0	0	19	118	250	0	170	10	70	250
5	0	1	0	1	2	0	0	3	0	0	3	25	35	0	133	9	108	250
6	0	0	0	2	8	0	0	0	0	0	0	12	22	0	205	13	32	250
7	3	2	0	29	44	0	11	20	0	2	3	136	250	0	162	8	80	250
8	1	9	2	4	142	1	2	14	0	0	1	74	250	0	104	33	113	250
9	2	2	5	11	16	0	3	10	26	0	0	34	109	0	140	39	71	250
10	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	14	17	0	127	25	98	250
11	0	0	0	0	3	0	3	2	0	1	0	23	32	0	130	11	109	250
12	8	8	7	7	0	0	0	0	0	0	3	217	250	0	76	29	145	250
13	0	41	10	24	15	0	3	2	2	0	12	117	226	0	105	18	127	250
14	0	1	2	17	155	0	0	12	1	0	0	62	250	0	109	40	101	250
15	1	9	3	3	19	6	1	0	0	0	2	206	250	0	39	24	187	250
16	0	5	8	0	1	0	1	0	4	0	2	57	78	0	40	59	151	250
17	0	99	12	12	3	0	0	5	0	0	22	97	250	3	45	14	186	250
18	0	7	1	15	129	1	1	8	5	0	2	81	250	0	89	28	133	250
19	4	4	1	11	165	1	0	9	4	0	3	48	250	0	88	19	143	250
20	0	0	1	8	197	6	1	1	1	0	0	35	250	0	195	30	25	250
21	0	8	1	6	115	3	0	23	0	1	1	92	250	0	83	33	134	250
22	0	3	9	0	29	1	4	8	1	1	2	53	111	0	87	76	87	250
23	0	2	0	2	25	1	1	5	0	0	1	9	46	0	83	42	125	250
24	1	12	10	3	14	2	1	0	1	0	0	206	250	0	58	40	152	250
25	0	12	13	3	3	4	0	0	1	0	1	213	250	0	15	37	198	250
26	0	8	1	11	13	3	0	0	0	0	6	208	250	0	15	50	185	250
27	0	4	0	21	157	0	1	12	3	0	0	52	250	0	62	73	115	250
28	2	7	0	26	27	1	0	44	0	0	0	35	142	2	98	71	79	250
29	0	3	1	5	2	1	6	4	1	0	0	14	37	0	107	39	104	250
30	0	0	0	1	13	0	2	0	0	0	0	7	23	1	133	25	91	250
31	0	0	1	12	145	7	2	13	0	0	1	69	250	0	124	10	116	250
32	0	7	1	15	136	0	2	24	1	0	4	60	250	0	100	28	122	250
33	1	1	0	20	120	1	6	27	1	0	1	72	250	0	153	16	81	250
34	2	2	0	23	68	0	11	31	0	0	7	106	250	0	174	13	63	250
35	2	5	1	20	104	9	1	1	4	1	1	101	250	0	125	15	110	250
36	0	2	0	0	2	0	0	2	0	0	5	167	178	0	96	103	51	250
37	0	0	0	2	215	2	1	0	0	0	0	30	250	0	161	50	39	250
38	0	1	0	13	119	0	4	28	1	0	5	79	250	0	128	18	104	250
39	0	2	1	5	119	1	2	18	0	0	3	99	250	0	149	22	79	250
40	0	2	0	25	122	0	14	11	0	2	0	74	250	0	127	21	102	250
41	0	1	0	2	15	0	8	3	0	0	1	11	41	0	146	23	81	250
42	0	1	0	1	1	0	0	2	1	0	0	18	24	0	177	20	53	250
43	0	2	1	15	99	2	8	16	0	0	5	102	250	2	155	19	74	250
44	0	1	0	14	37	0	28	12	1	0	12	145	250	3	127	16	104	250
45	0	0	0	5	20	1	17	8	1	0	52	121	225	0	130	10	110	250
46	1	0	0	11	35	0	12	22	0	3	17	149	250	0	79	18	153	250
47	1	66	29	8	10	0	2	1	0	0	15	20	152	2	91	12	145	250
48	1	4	0	1	1	2	7	0	0	0	0	7	23	4	168	20	58	250
49	4	69	25	7	20	13	2	0	0	0	6	104	250	1	65	23	161	250
50	0	3	0	1	6	1	1	0	0	0	0	13	25	0	135	20	95	250
51	1	11	4	2	12	27	0	6	2	2	0	171	238	0	121	31	98	250
52	9	14	12	9	10	5	0	2	1	0	3	185	250	0	70	28	152	250
53	1	21	7	15	11	1	0	0	2	0	4	188	250	0	51	32	167	250
54	2	1	0	1	4	0	0	0	1	0	0	9	18	0	132	23	95	250
55	0	17	7	14	36	1	0	8	0	2	0	165	250	1	130	26	93	250
56	2	1	2	0	4	0	0	0	0	0	0	28	37	0	137	23	90	250
57	1	4	3	4	6	0	0	0	2	0	0	58	78	0	115	16	119	250
58	0	3	0	1	1	10	3	3	62	0	1	166	250	1	97	26	126	250
59	0	1	0	1	15	1	1	4	0	0	2	9	34	0	227	10	13	250
60	0	13	2	2	4	0	3	1	0	0	1	11	37	0	190	8	52	250

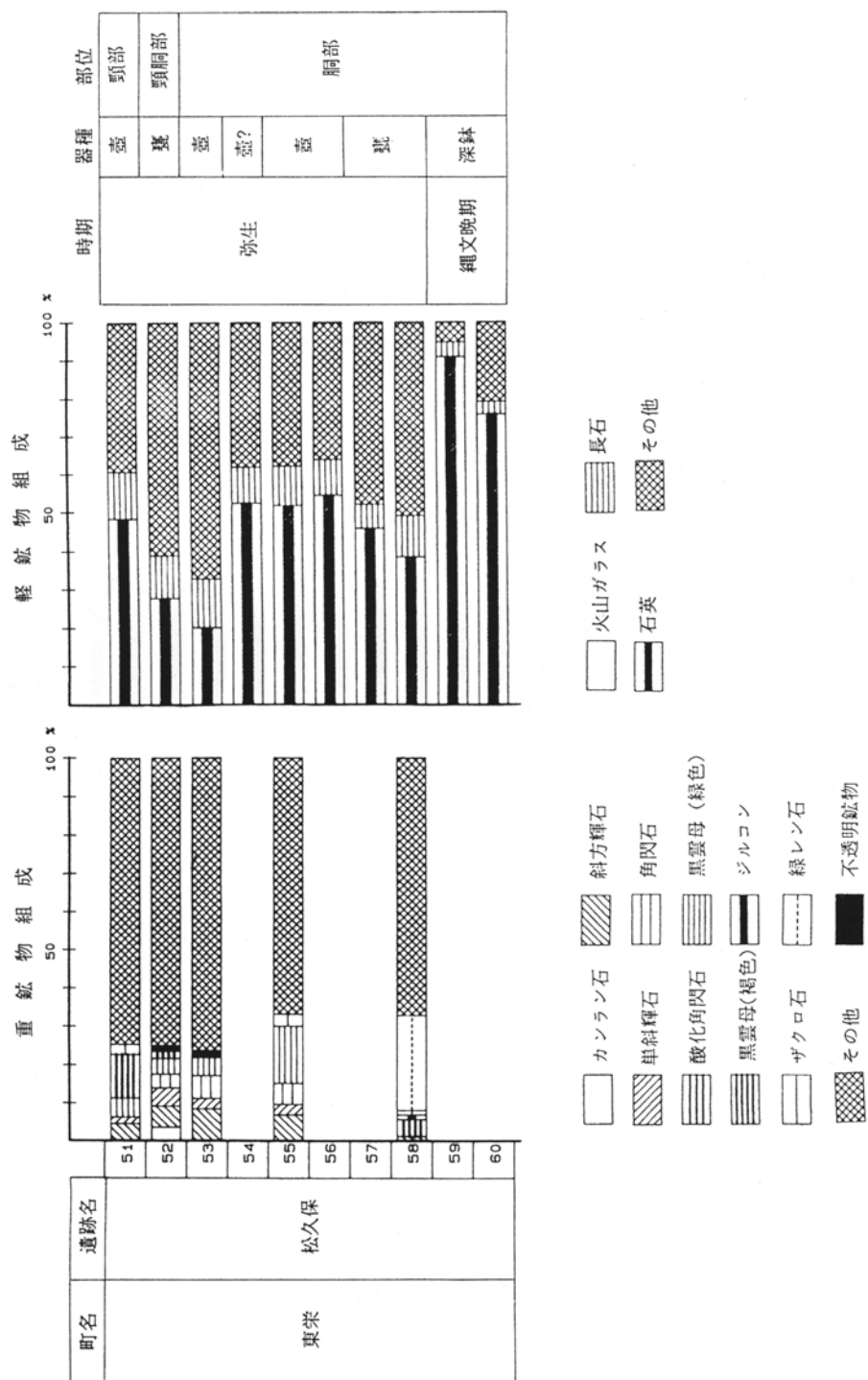
第15表 胎土分析試料組成表



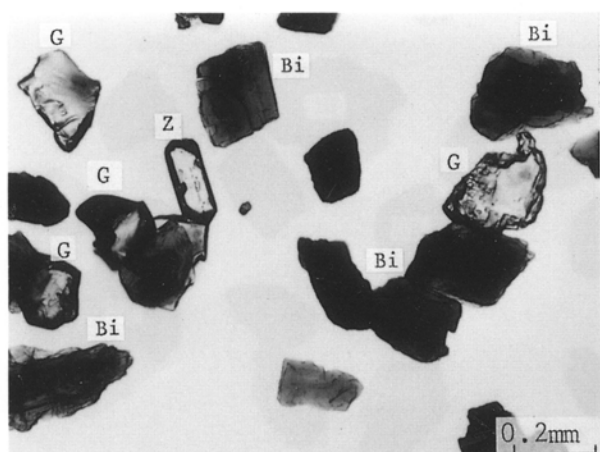
第16表 胎土分析試料 重鉦物および軽鉦物組成ダイアグラム(1)



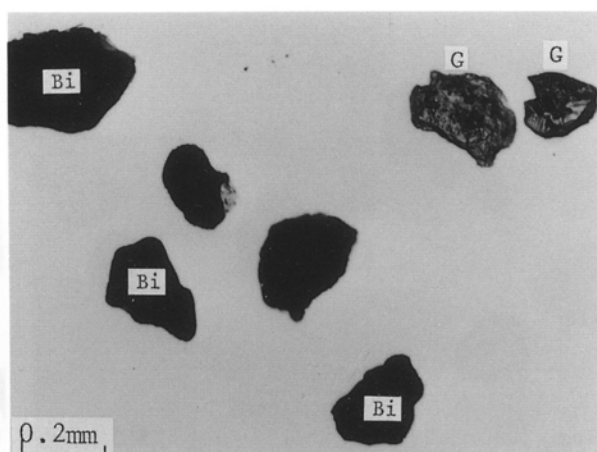
第17表 胎土分析試料 重鉍物および軽鉍物組成ダイアグラム(2)



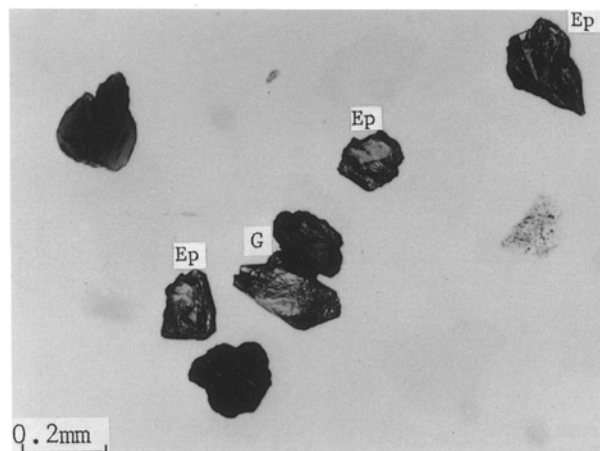
第18表 胎土分析試料 重鉱物および軽鉱物組成ダイアグラム (3)



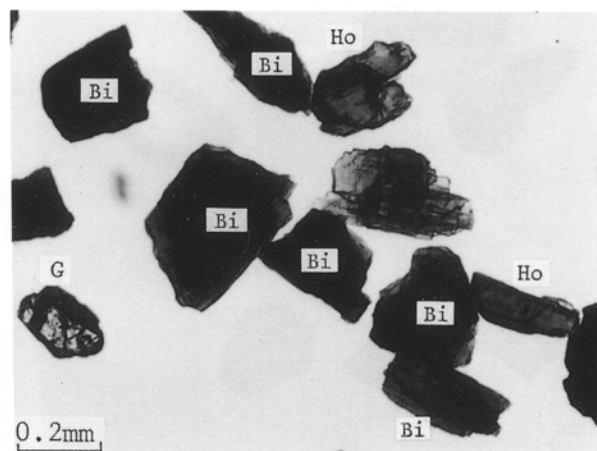
1



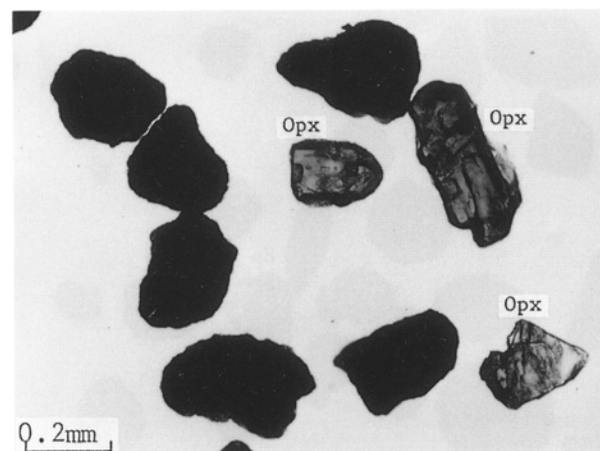
2



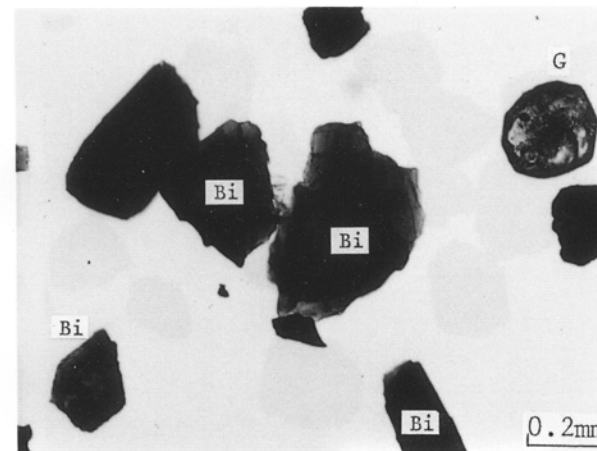
3



4



5

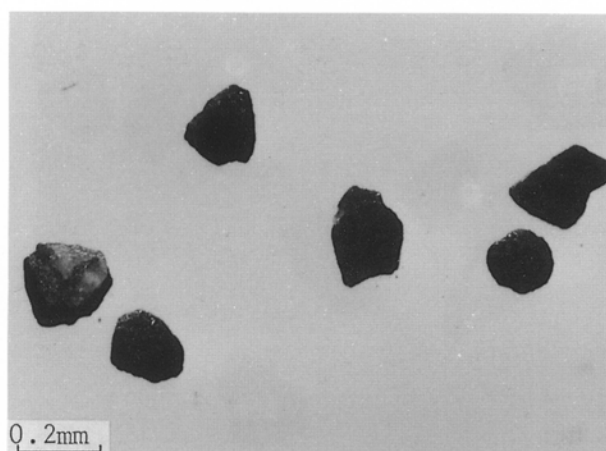


6

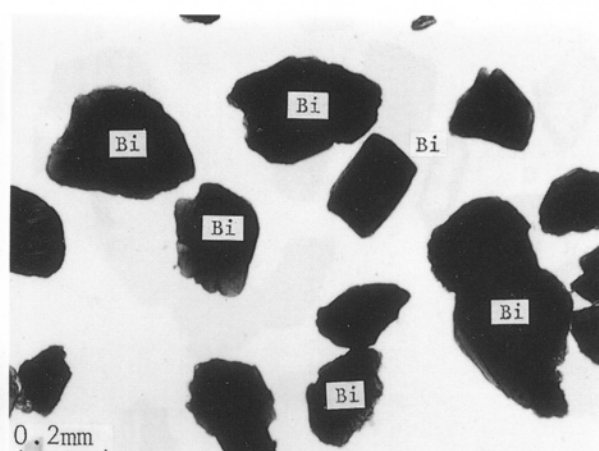
1. 試料番号2, 2. 試料番号8, 3. 試料番号9, 4. 試料番号14,
5. 試料番号25, 6. 試料番号31

凡例 Opx: 斜方輝石, Ho: 角閃石, Bi: 黒雲母, Z: ジルコン,
G: ザクロ石, Ep: 緑レン石.

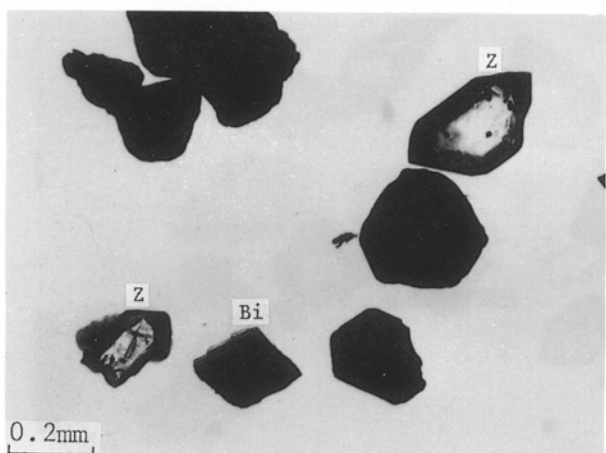
第21図 重鉱物顕微鏡写真(1)



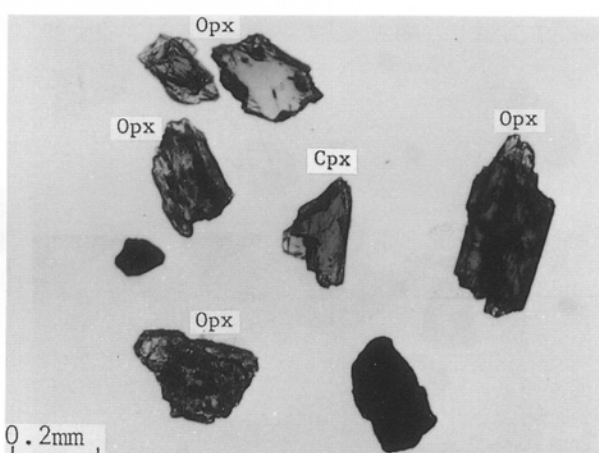
7



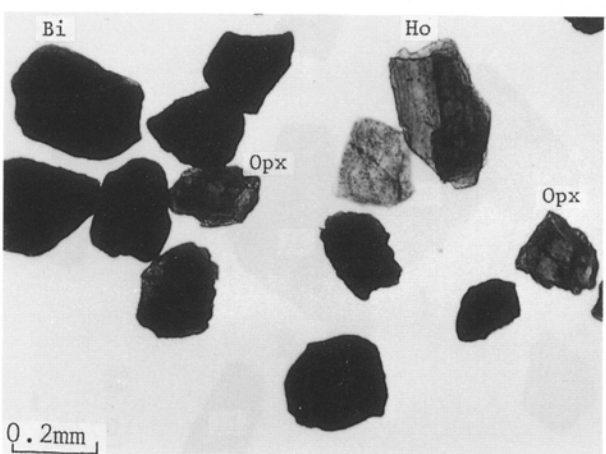
8



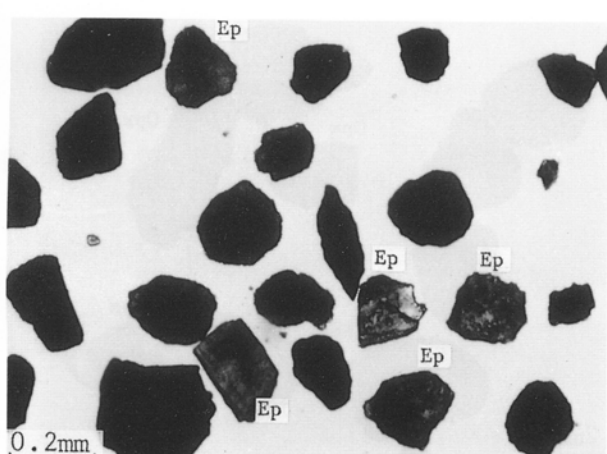
9



10



11



12

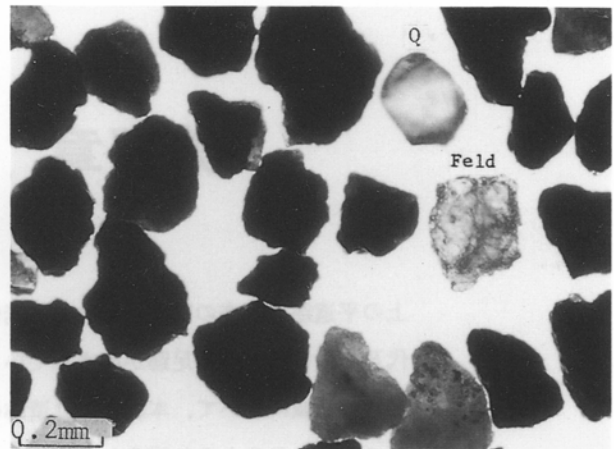
7. 試料番号36(落射光下), 8. 試料番号37, 9. 試料番号44, 10. 試料番号47,
11. 試料番号53, 12. 試料番号58

凡例 Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石, Bi: 黒雲母, Z: ジルコン,
Ep: 緑レン石.

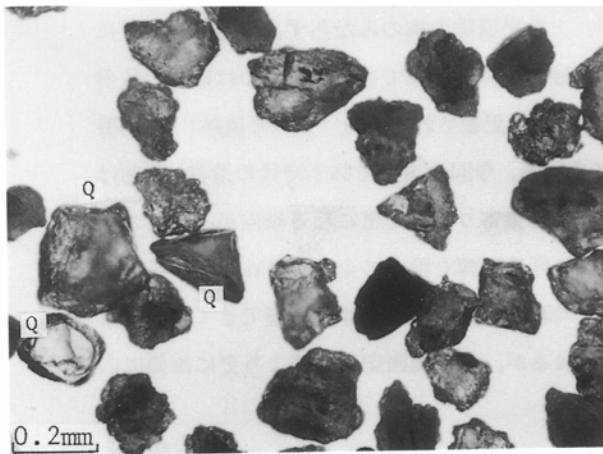
第22図 重鉱物顕微鏡写真(2)



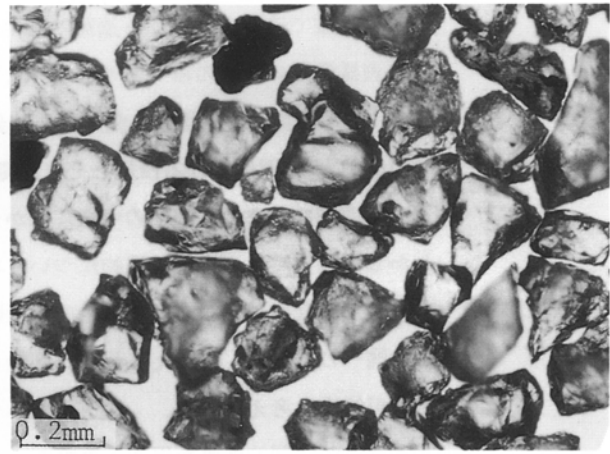
13



14



15



16

13. 試料番号1(透明粒は石英), 14. 試料番号25, 15. 試料番号36(透明粒のうちQ以外は長石),

16. 試料番号59(透明粒は石英)

凡例 Q: 石英, Feld: 長石.

第23図 軽鉱物顕微鏡写真

第Ⅶ章 ま と め

上の平遺跡は調査の結果、遺物の一括性はあまり認められなかったものの、縄文、弥生時代及び中世の人々の足跡が印されていることが判った。そして、面的な発掘調査例の希薄なこの地域において、本調査では遺跡の広がりが確認できるだけの調査区を確保することができた。このような調査を実施できたことが、本調査の意義であり成果であったと考える。

この地域で確認されている遺跡の大半が、上の平遺跡の例のみならず、分布調査などによる表採資料の確認のみであり、遺構など遺跡の実体が把握できているものはほんの数例である。本遺跡の調査区は、愛知県遺跡分布地図に記載されている「上の平遺跡」（遺跡番号71009）の範囲における西端とその外側にあたる。今回の調査で弥生時代の遺構、遺物はこの範囲内に集まり、範囲の中心に向かう（A区東寄り）ほど密になる傾向がみられた。しかし、縄文時代の遺構、遺物については、A区南西側を除いて全体に散在していて、この限りではない。したがって「上の平遺跡」の範囲は、中心の実体が把握できていないため、同一の遺跡として捉えられるか判断しかねるが、分布地図記載範囲より更に西側に広がる可能性も考えられる。

本遺跡の空間的特質を捉える手段の一つとして、出土土器の胎土分析を業者に依頼した。本遺跡の出土遺物には縄文時代早期から中世まで時期幅があるが、その中で一括性の認められた弥生時代中期の出土遺物に時期を限定して、周辺遺跡の資料を集める予定であった。しかし、周辺遺跡のこの時期の資料は点数的に非常に少ないため、縄文晩期から弥生後期まで時期幅を広げた分析となった。

これまで本センターの依頼してきた胎土分析の方法は、胎土中の砂分の重鉱物組成を胎土の特徴として捉えるものであった。これは土器作成時に、粘土中に調合される混和材の特徴を求めることにより、その出自を推定するためと思われ、今回も用いられた。

分析の結果、今回提出した奥三河地域の資料は、これまで分析された三河平野部の資料と異なる特徴が見出せた。すなわち平野部においては角閃石が主体を成すのに対し、山間部では黒雲母が主体を成す。更に本遺跡のみがこの限りではなく、角閃石、黒雲母は少量の要因を窮い知ることではできなかったが、今後の資料の増加に伴い明らかにされて行くことを期待したい。

本遺構の調査により確認できた遺構、遺物は、奥三河地域の縄文、弥生時代の人々の足跡を考える時、有効な資料となるであろう。今回の調査で検出されたSB102は郡内最古の弥生住居となったが、この地域の各時期における未解明な部分には、こうした資料の増加が更に望まれる。

遺物番号	挿図	遺溝など	器 種	登録番号	遺物番号	挿図	遺溝など	器 種	登録番号
1	15	検出	深針	E-1	37	17	S B 102	壺	E-37
2	"	S X 103	"	E-2	38	"	"	"	E-38
3	"	検出	"	E-3	39	"	検出	"	E-39
4	"	"	"	E-4	40	"	検Ⅱ	"	E-40
5	"	検Ⅱ	"	E-5	41				欠
6	"	検出	"	E-6	42	17	S X 103	"	E-42
7	"	"		E-7	43	"	検Ⅱ	細頸壺	E-43
8	"	"	深針?	E-8	44	"	"	壺	E-44
9	"	"	"	E-9	45	"	検出	"	E-45
10	"	"	深針	E-10	46	"	S X 103	壺?	E-46
11	"	"	"	E-11	47	"	検Ⅱ	壺	E-47
12	"	検Ⅱ	"	E-12	48	"	検出	甕	E-48
13	"	S K 138	"	E-13	49	"	"	"	E-49
14	"	検Ⅱ	針?	E-14	50	"	"	針?	E-50
15	"	検出	深針	E-15	51	"	"	甕	E-51
16	"	検Ⅱ	深針?	E-16	52	"	検Ⅱ	台	E-52
17	"	"	"	E-17	53	"	検出	壺	E-53
18	"	S K 197	"	E-18	54	"	検Ⅱ	甕?	E-54
19	"	検出	深針	E-19	55	"	"	針	E-55
20	"	S K 171	"	E-20	56	"	検出	甕?	E-56
21	"	検出	"	E-21	57	"	"	台付針?	E-57
22	"	検Ⅱ	"	E-22	58	"	"	甕	E-58
23	"	検出	"	E-23	59	"	検Ⅱ	"	E-59
24	"	S K 171	"	E-24	60	16	検出	"	E-60
25	"	検出	"	E-25	61	"	"	"	E-61
26	"	検Ⅱ	"	E-26	62	"	検Ⅱ	"	E-62
27	"	検出	"	E-27	63	"	検出	"	E-63
28	"	"	"	E-28	64	"	S X 103	"	E-64
29	"	検Ⅱ	針	E-29	65	"	"	"	E-65
30	"	S K 101	深針?	E-30	66	"	検出	"	E-66
31	"	検出	"	E-31	67	"	"	"	E-67
32	"	"	無文粗製深針	E-32	68	"	検Ⅱ	"	E-68
33	"	表採	針	E-33	69	"	検出	"	E-69
34	"	検出	深針	E-34	70	"	検Ⅱ	"	E-70
35	"	S K 146	針?	E-35					
36	17	検出	壺	E-36					

第19表 土器対照表

付 表

遺物番号	挿図	遺溝など	器 種	重さ(g)	比 重	登録番号	遺物番号	挿図	遺溝など	器 種	重さ(g)	比 重	登録番号
101	18	検Ⅱ	打製石斧(短冊)	55.9	3.07	S-1	137	19	検出	石鏃	1.0		S-37
102	"	"	" (短冊)	31.6	2.90	S-2	138	"	"	"	0.6		S-38
103	"	"	" (短冊)	39.1	2.90	S-3	139	"	"	"	1.1		S-39
104	"	"	" (短冊)	83.6	2.88	S-4	140	"	SX103	"	1.1		S-40
105	"	検出	" (短冊)	108.5	3.01	S-5	141	"	検出	"	1.5		S-41
106	"	SK 190	" (短冊)	80.3	3.06	S-6	142	"	"	"	2.1		S-42
107	"	検出	"	102.3	2.40	S-7	143	"	"	"	1.6		S-43
108	"	検Ⅱ	" (短冊)	105.0	2.53	S-8	144	"	"	鉤形石器	1.7		S-44
109	"	検出	" (短冊)	145.3	2.49	S-9	145	"	検Ⅱ	磨製石斧	13.8	2.34	S-45
110	"	"	" (短冊)	198.0	2.48	S-10	146	"	"	"	161.5	3.18	S-46
111	"	"	" (短冊)	142.7	30.4	S-11	147	"	SD 02	"	131.3	3.00	S-47
112	"	検Ⅱ	" (短冊)	178.3	3.06	S-12	148	"	検出	"	52.9	2.89	S-48
113	"	SX103	" (短冊)	275.1	2.59	S-13	149	"	"	"	339.2	2.92	S-49
114	"	検Ⅱ	"	59.4	2.69	S-14	150	"	"	"	249.9	3.08	S-50
115	"	SB 101	" (撥形)	84.6	2.78	S-15	151	"	"	"	130.3	2.98	S-51
116	"	検出	" (撥形)	41.5	2.92	S-16	152	"	"	乳棒状磨製石斧	314.5	3.02	S-52
117	"	検Ⅱ	" (撥形)	52.5	2.65	S-17	153	20	"	スクレイパー	28.8	2.64	S-53
118	"	"	"	143.8	2.52	S-18	154	"	検Ⅱ	"	19.3	2.33	S-54
119	"	SB 102	" (撥形)	180.6	3.06	S-19	155	"	"	"	12.4	2.58	S-55
120	"	検Ⅱ	" (撥形)	76.0	3.00	S-20	156	"	"	"	12.3	2.41	S-56
121	"	"	" (撥形)	81.2	2.34	S-21	157	"	検出	"	3.4		S-57
122	"	"	" (撥形)	151.0	2.97	S-22	158	"	検Ⅱ	"	10.1	2.40	S-58
123	"	"	" (撥形)	201.3	2.46	S-23	159	"	SB 102	"	4.6		S-59
124	"	"	"	40.8	2.67	S-24	160	"	検Ⅱ	"	6.4		S-60
125	"	"	" (撥形)	61.9	3.03	S-25	161	"	"	"	2.7		S-61
126	19	検出	石鏃	0.6		S-26	162	"	"	切目石鏃	17.0	2.98	S-62
127	"	SB 102	"	0.8		S-27	163	"	検出	石刀	11.4	3.0	S-63
128	"	検出	"	0.6		S-28	164	"	"	石匙	4.3		S-64
129	"	"	"	0.6		S-29	165	"	"	叩石	114.4	2.25	S-65
130	"	"	"	1.0		S-30	166	"	"	凹石	281.4	2.32	S-66
131	"	"	"	0.4		S-31	167	"	検Ⅱ	磨石?	204.5	2.22	S-67
132	"	"	"	1.0		S-32	168	"	"	凹石	439.0	2.52	S-68
133	"	検Ⅱ	"	0.3		S-33	169	"	検出	"	302.5	2.62	S-69
134	"	検出	"	0.3		S-34	170	"	"	"	200.3	2.50	S-70
135	"	"	"	2.0		S-35	171	"	検Ⅱ	"	554.2	2.34	S-71
136	"	"	"	2.2		S-36							

第20表 石器対照表

遺 物 番 号	X (m)	Y (m)	絶 対 高 (m)	サ ン プ ル 番 号
1	-101927.78	47536.22	294.822	63
3	-101920.35	47549.36	295.251	96
4	-101934.20	47508.20	292.929	109
6	-101924.10	47544.50	295.140	2
7	-101930.40	47538.27	294.710	83
8	-101923.07	47555.12	294.712	74
9	-101930.73	47538.09	294.693	84
10	-101923.70	47551.43	294.844	97
11	-101930.73	47523.80	293.927	40
15	-101918.60	47548.50	295.450	69
19	-101914.67	47550.00	295.988	100
21	-101915.73	47550.70	295.779	102
23	-101948.50	47545.33	293.896	67
25	-101900.71	47526.56	295.835	57
27	-101918.67	47550.17	295.407	70
28	-101923.03	47554.00	295.950	72
31	-101899.95	47528.14	296.269	21
32	-101895.25	47527.68	296.676	16
33	-101943.38	47535.70	294.114	108
34	-101917.50	47525.76	294.731	79
36	-101928.73	47543.28	294.839	65
39	-101932.63	47549.36	294.645	28
41	-101911.15	47548.20	296.423	76
45	-101886.08	47510.55	296.267	51
48	-101931.22	47548.75	294.791	25
50	-101932.30	47548.16	294.779	27
51	-101932.63	47550.95	294.493	32
56	-101934.76	47548.14	294.530	30
57	-101897.40	47526.33	296.333	20
58	-101933.33	47543.05	294.726	50
60	-101933.84	47542.52	294.642	49
61	-101927.04	47553.43	294.649	48
63	-101931.23	47520.19	293.743	45
66	-101932.01	47544.08	294.727	66
67	-101930.80	47551.10	294.543	35

第21表 遺物出土地点一覧表(1)

付 表

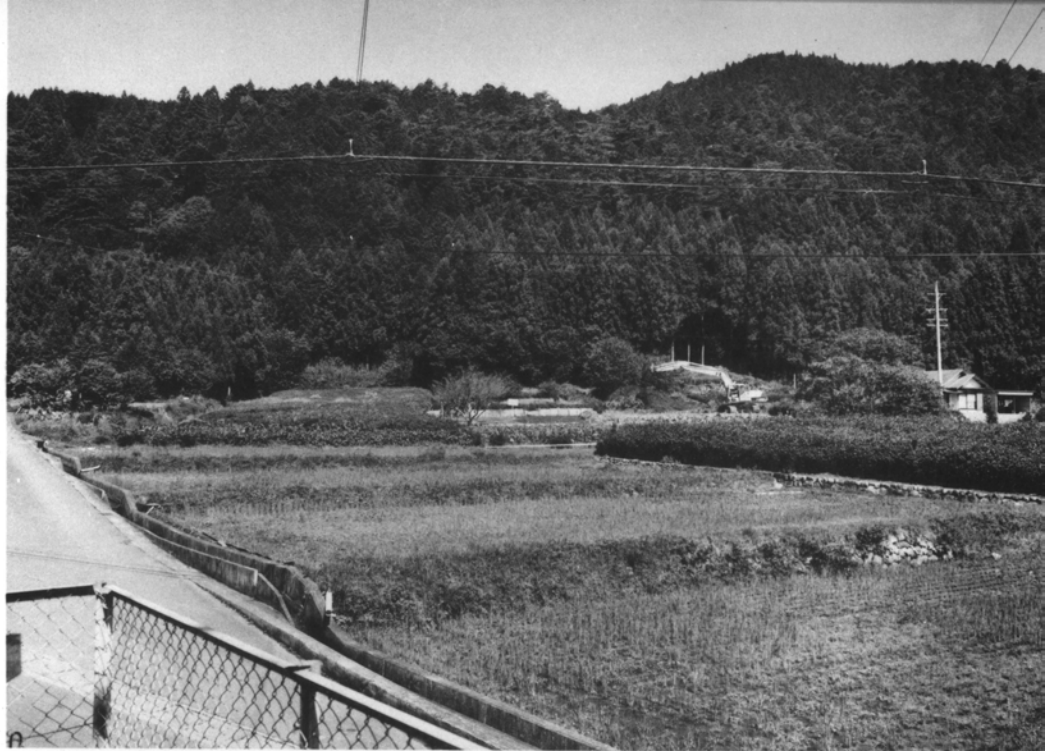
遺 物 番 号	X (m)	Y (m)	絶 対 高 (m)	サ ン プ ル 番 号
69	-101931.54	47548.70	294.700	26
105	-101936.30	47509.43	293.146	22
107	-101936.27	47551.00	294.215	36
109	-101922.84	47555.71	294.794	47
110	-101923.70	47554.90	294.800	42
111	-101892.55	47524.12	296.513	43
116	-101891.99	47518.33	296.036	77
126	-101905.83	47524.35	295.504	44
128	-101939.18	47538.12	294.354	6
129	-101929.12	47520.31	294.808	107
130	-101926.96	47526.94	294.526	7
131	-101886.50	47518.14	296.439	73
132	-101933.26	47539.99	295.407	101
134	-101921.48	47524.11	294.646	1
135	-101926.34	47549.59	294.823	103
136	-101939.17	47538.02	294.354	5
137	-101928.32	47550.40	294.643	98
138	-101926.06	47525.30	294.419	13
139	-101889.93	47514.07	296.079	78
141	-101935.70	47548.00	294.548	14
142	-101930.50	47539.68	294.702	80
143	-101933.43	47548.75	294.579	31
144	-101906.80	47525.41	295.538	23
148	-101910.16	47520.36	294.891	53
149	-101942.47	47546.19	294.370	3
150	-101927.29	47548.17	294.821	46
151	-101939.90	47517.13	293.533	4
152	-101889.90	47522.90	296.784	12
153	-101933.78	47551.00	294.427	33
157	-101916.86	47544.20	295.568	105
163	-101943.90	47528.25	293.863	19
164	-101922.24	47554.50	294.868	71
165	-101936.20	47551.42	294.209	37
166	-101900.55	47521.66	295.611	58
169	-101899.00	47526.15	297.046	56
170	-101917.77	47546.29	295.515	68

第22表 遺物出土地点一覧表

図

版

調査前風景
(南西より)

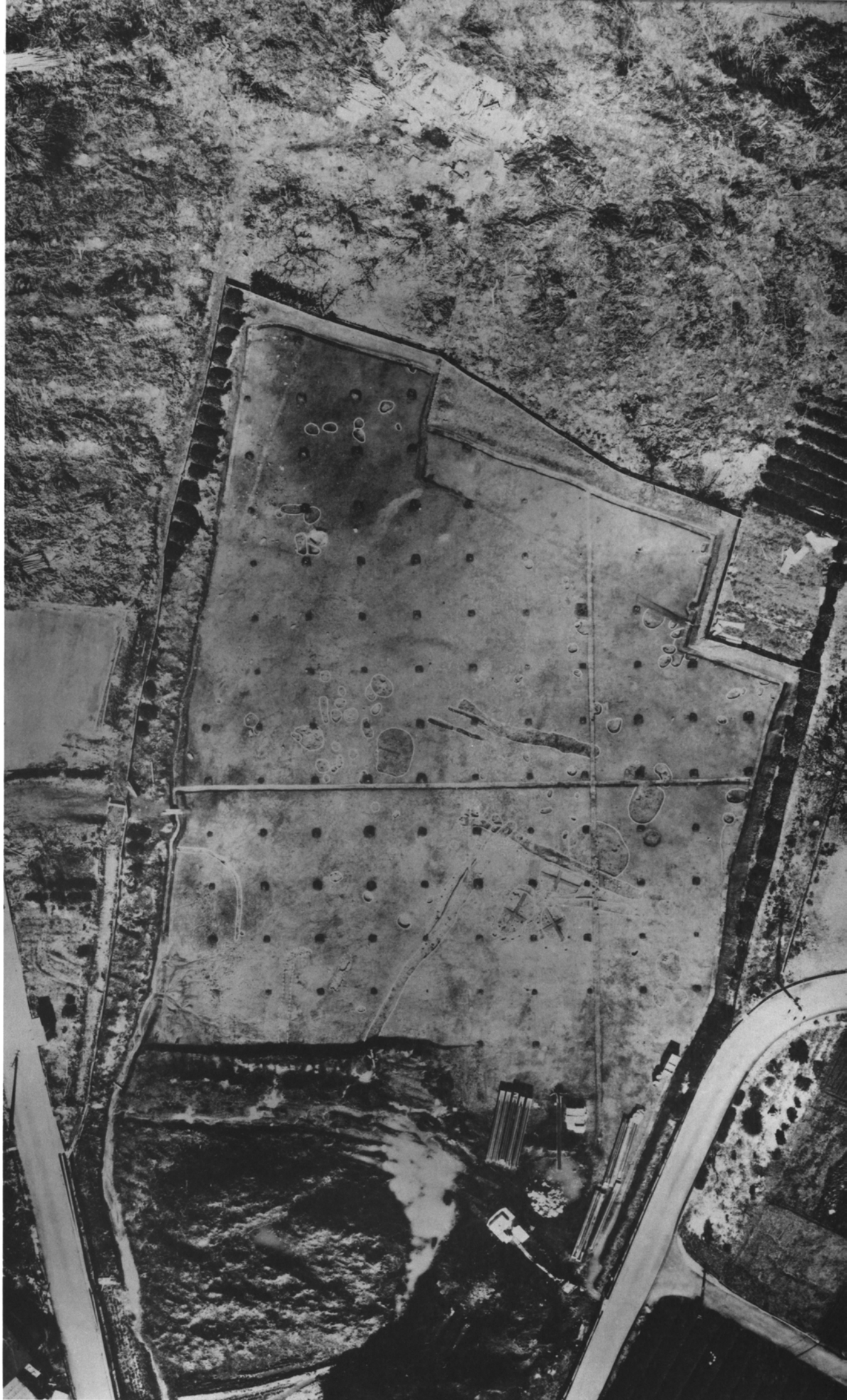


作業風景
(南東より)



航空測量
(北西より)





調査区遠景
(南西より)



同 上



同 上



調査区近景
(南西より)



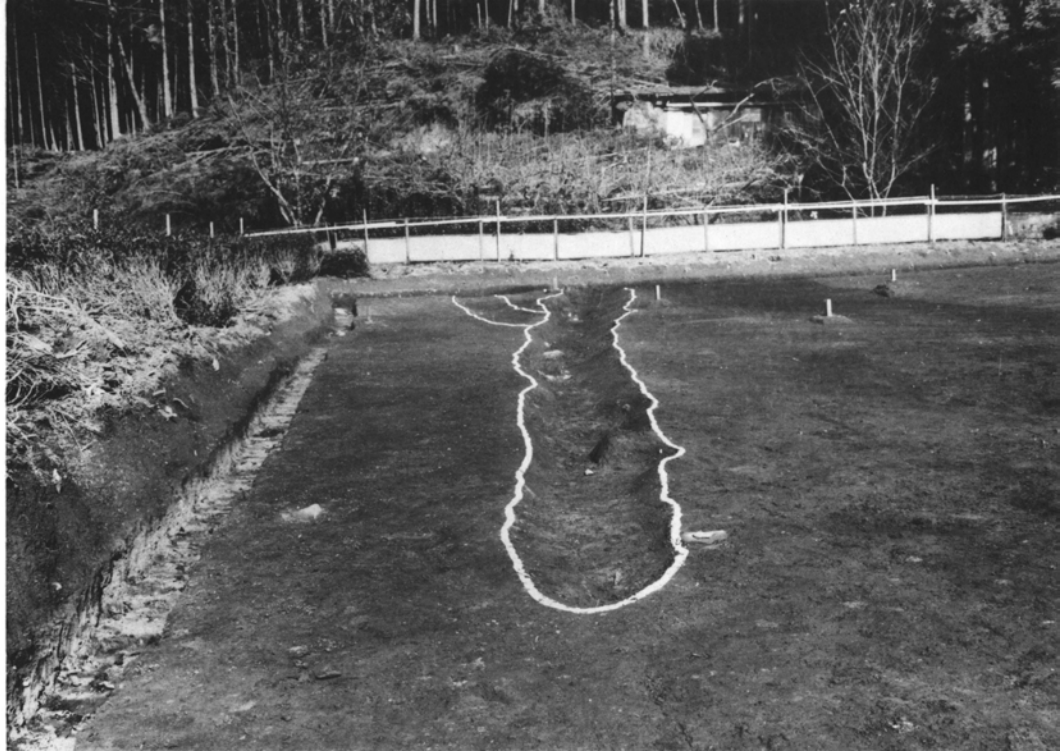
調査区全景
(南西より)



同 上
(西より)



S D01・02
(南東より)



S D01断面
(南より)



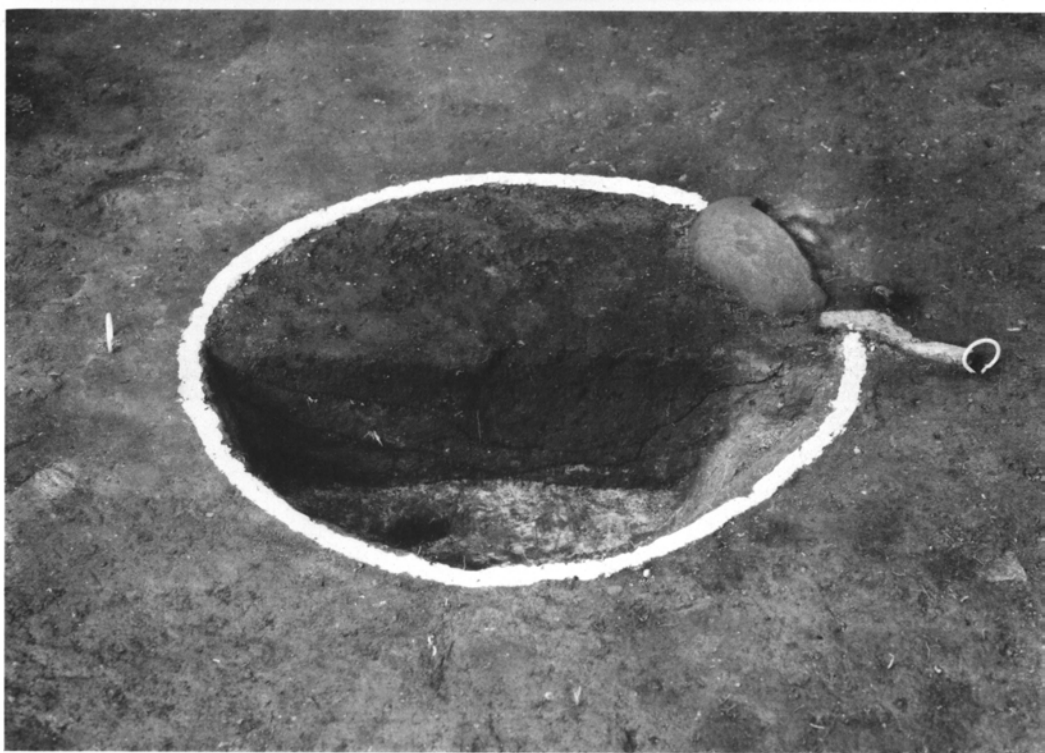
調査区北東角土層断面
(南西より)



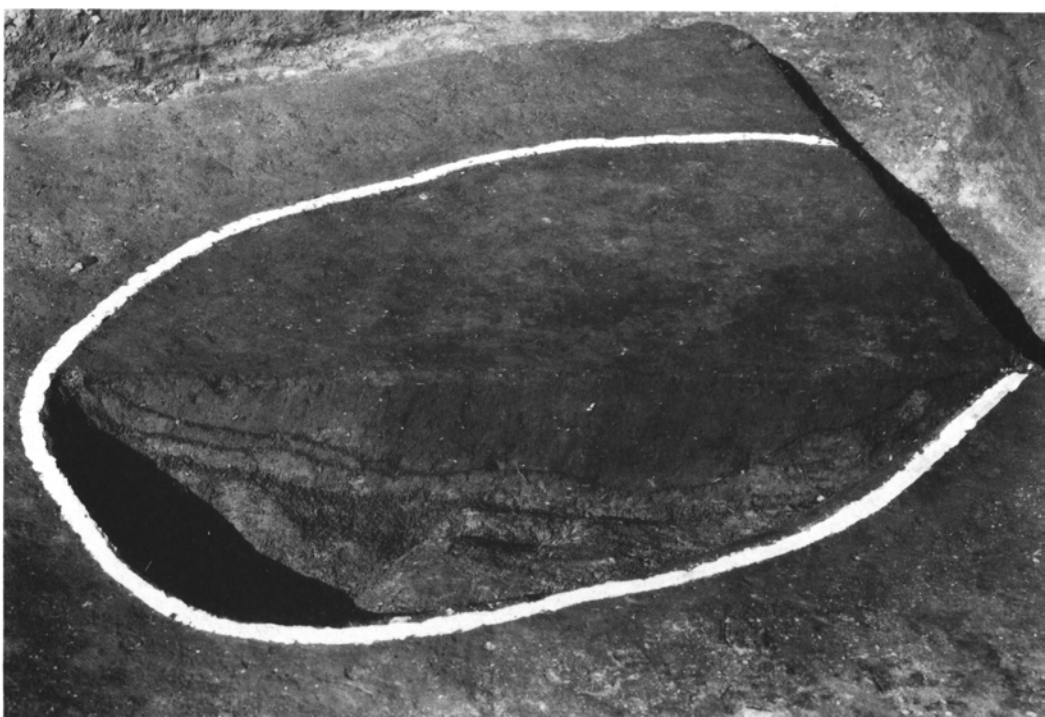
S K02断面
(南より)



S K122断面
(南より)



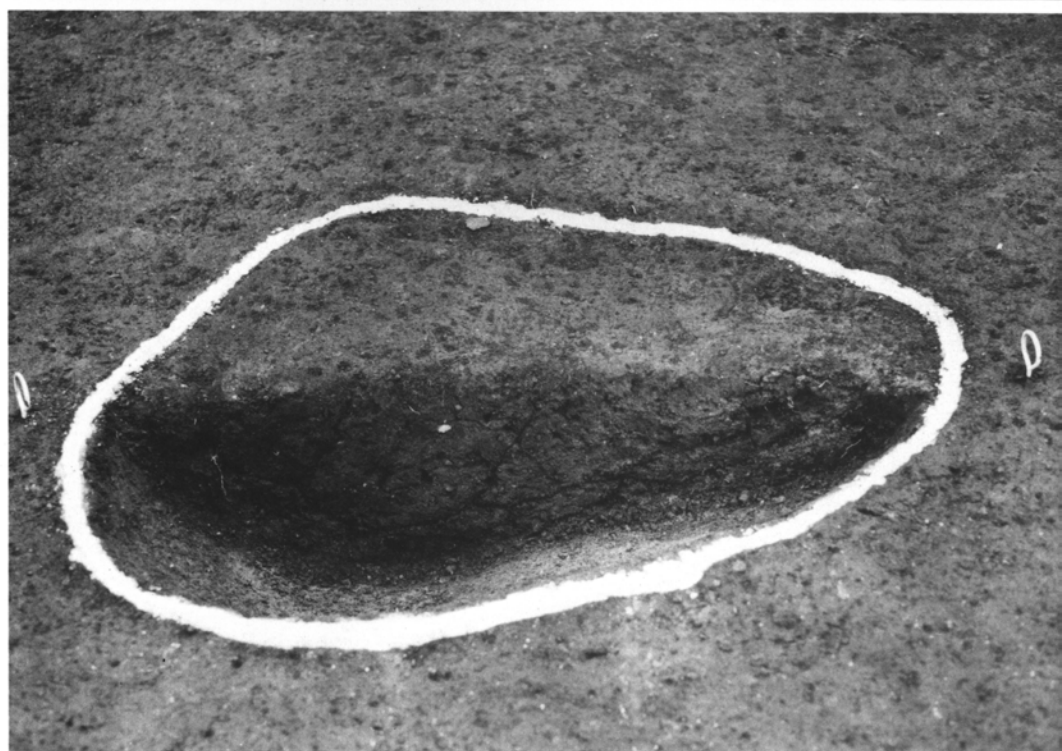
S K147
(南西より)



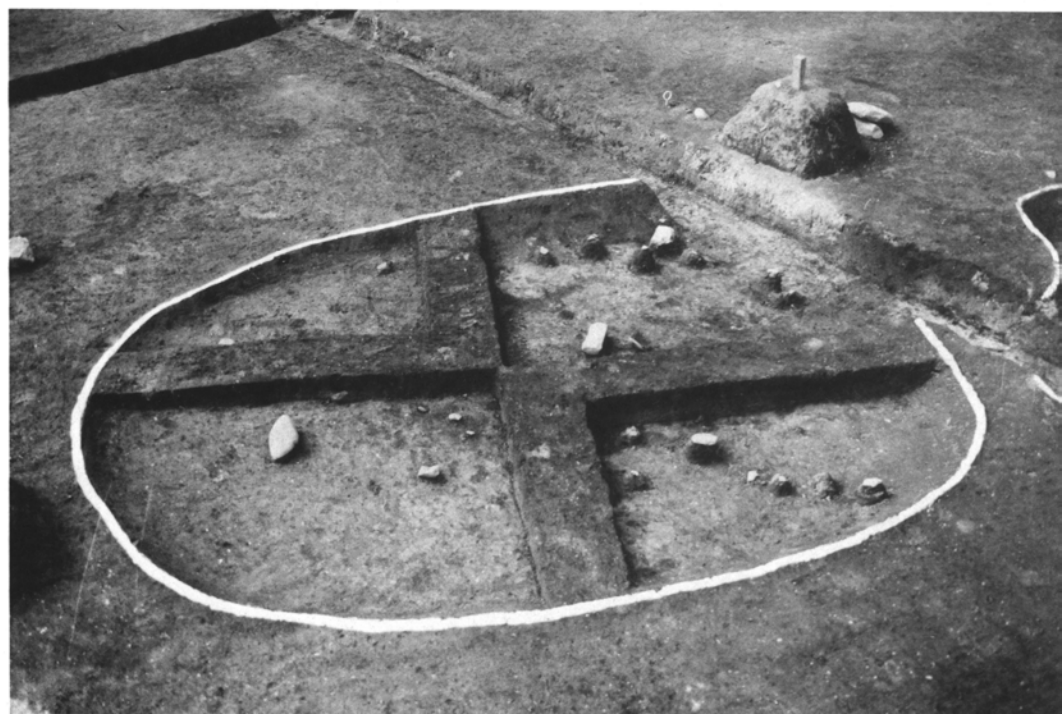
S K02
(南西より)



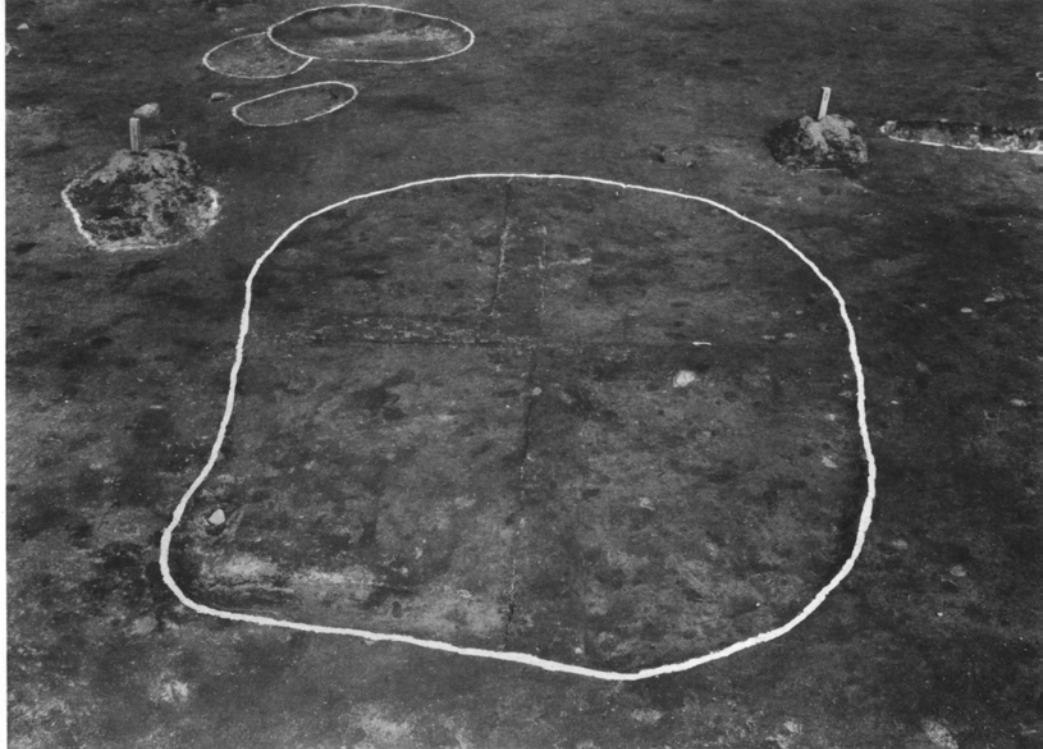
S K102断面
(南東より)



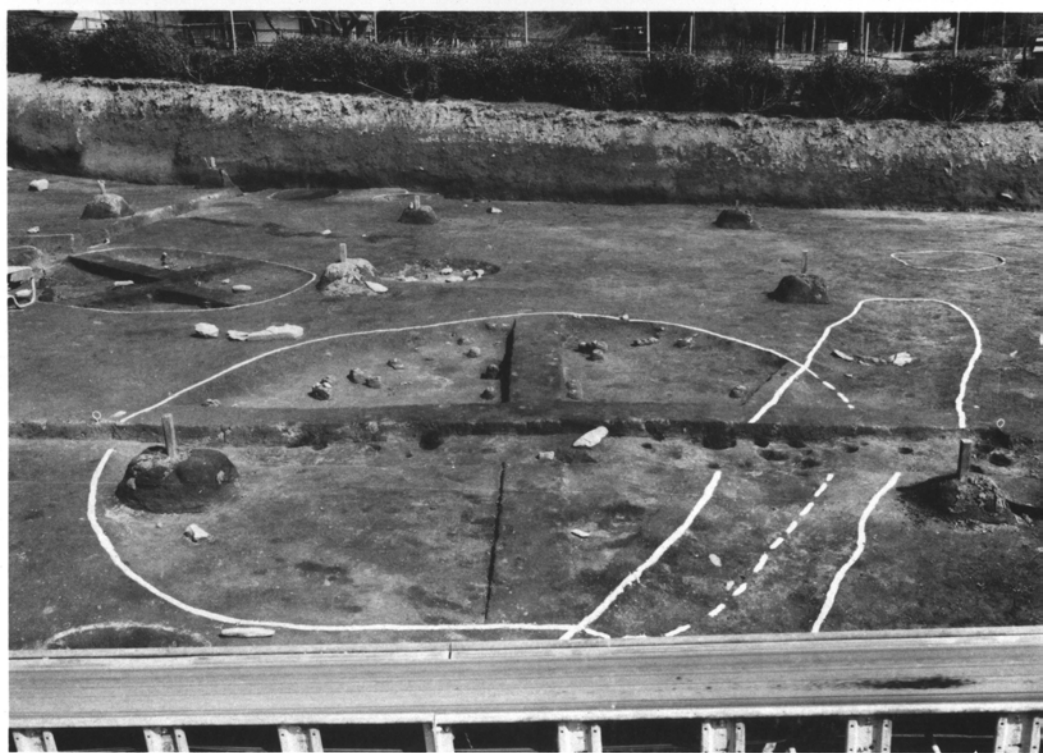
S X103
(南東より)



S B 101
(南より)

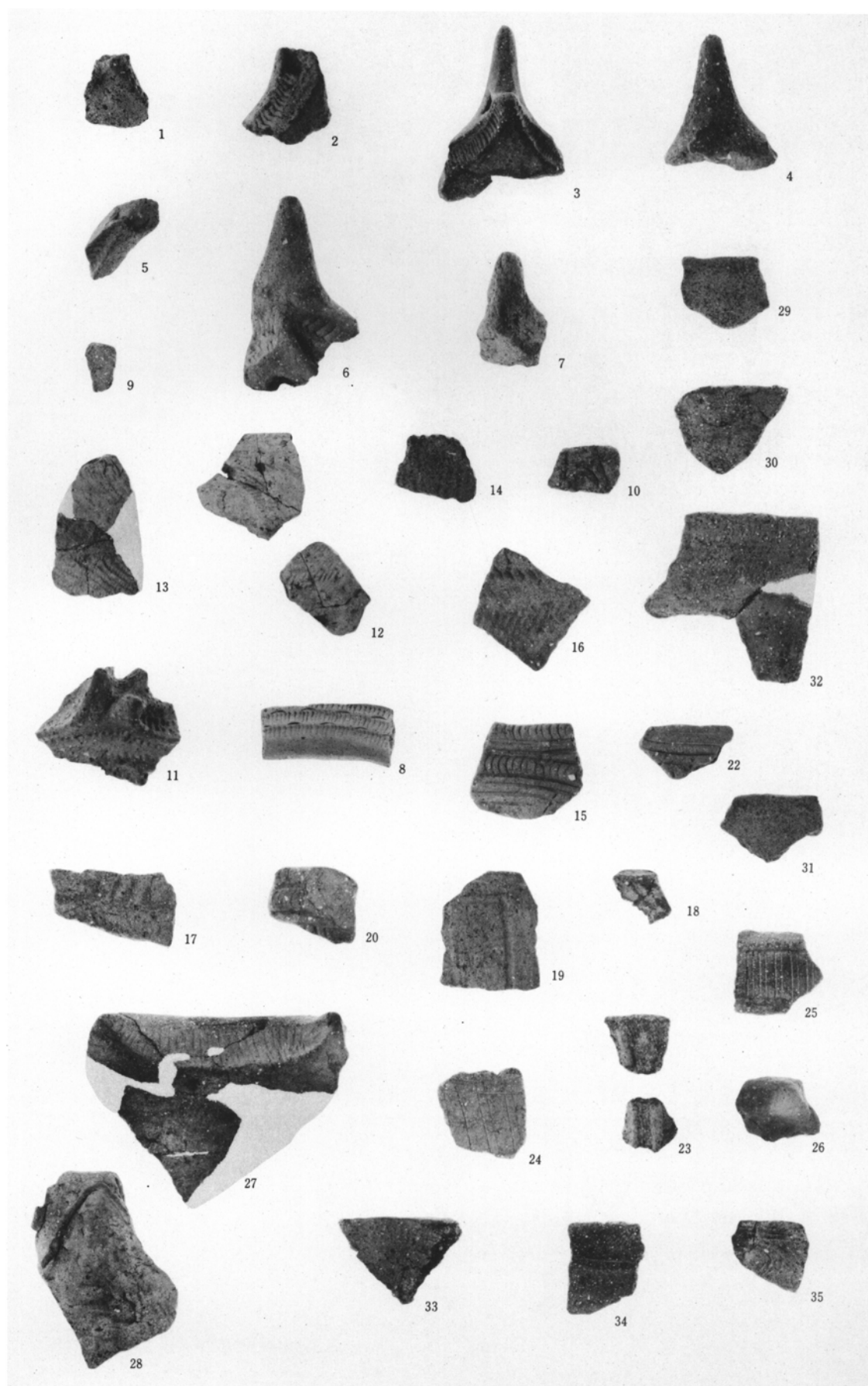


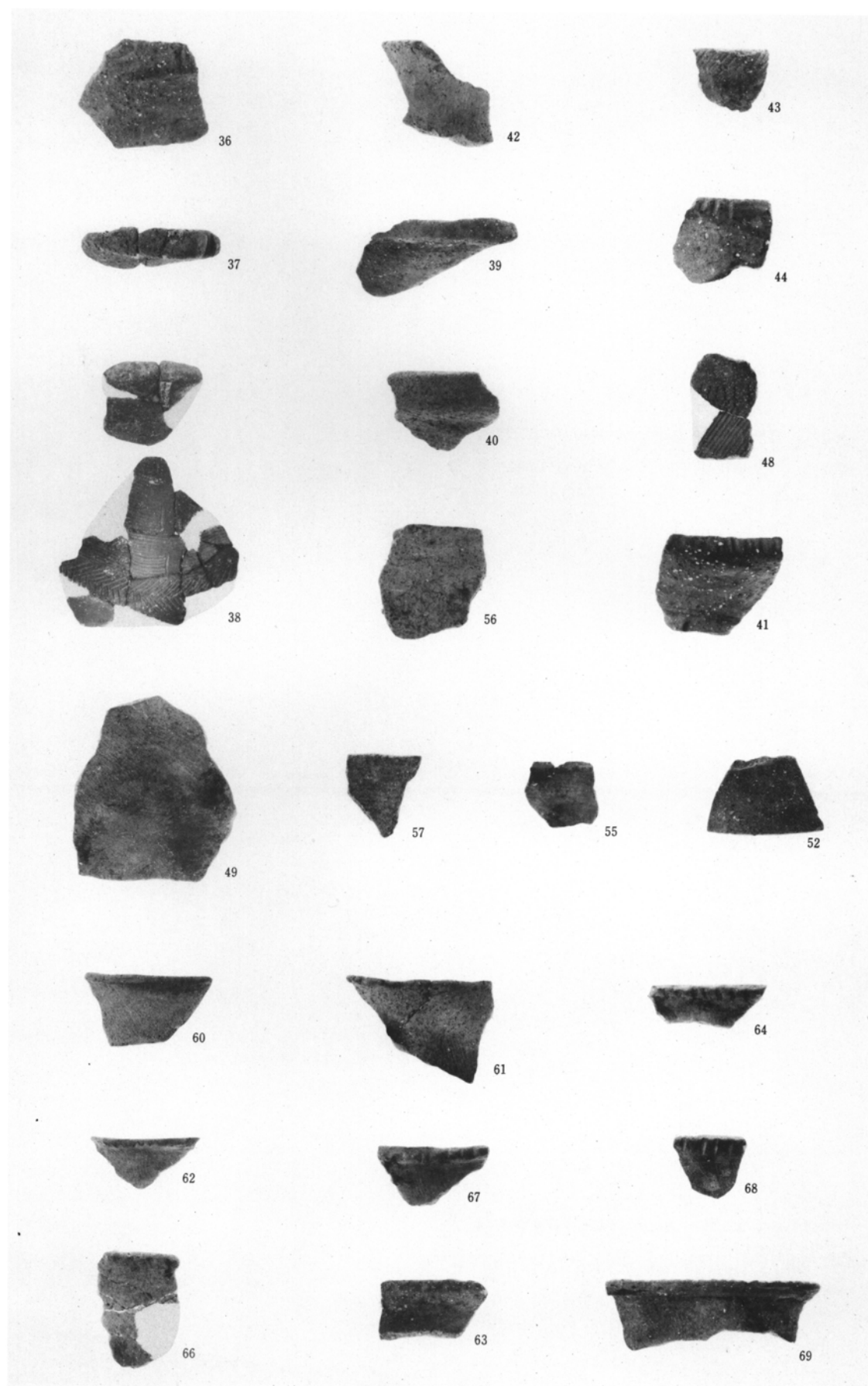
S B 102
(西より)

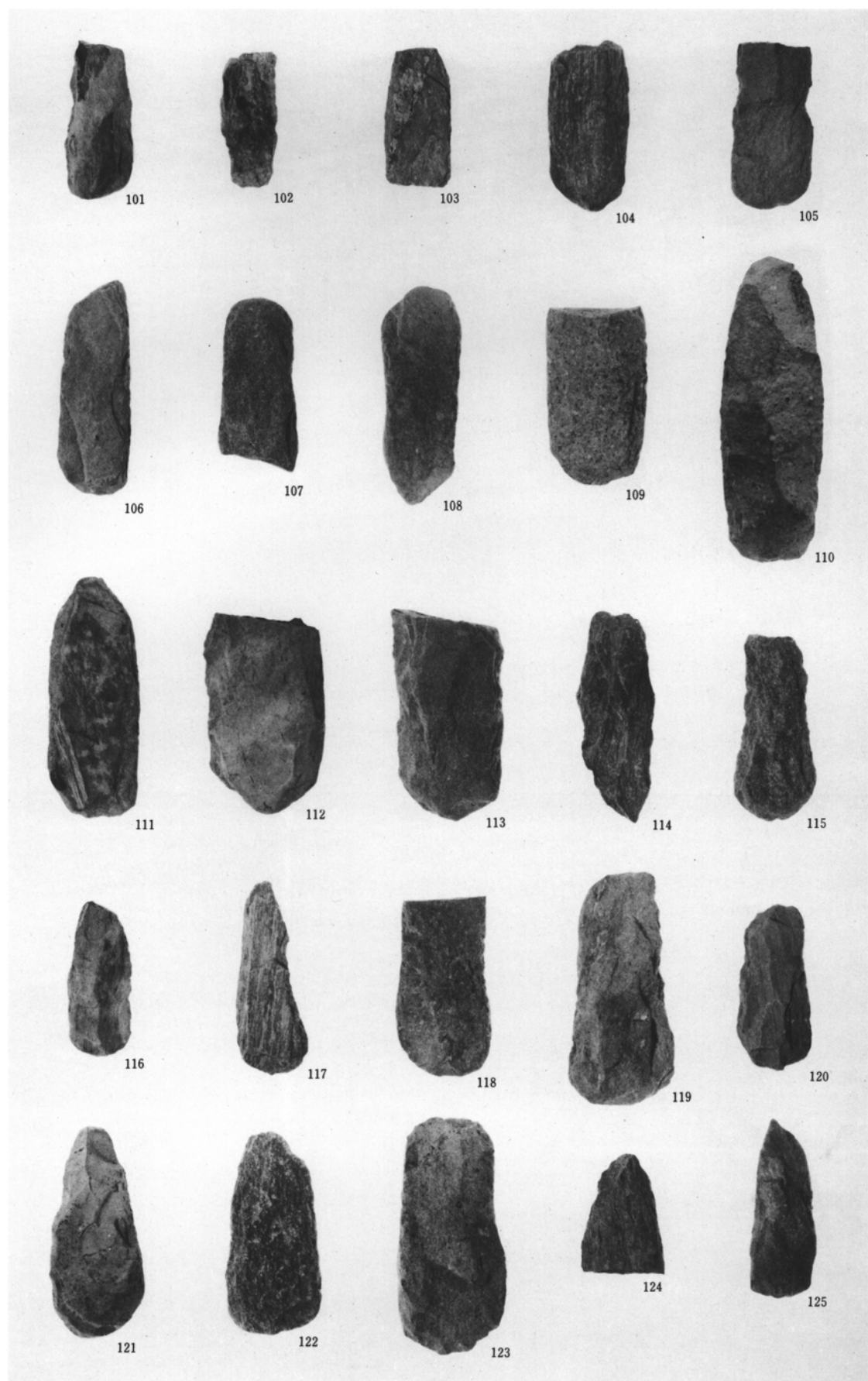


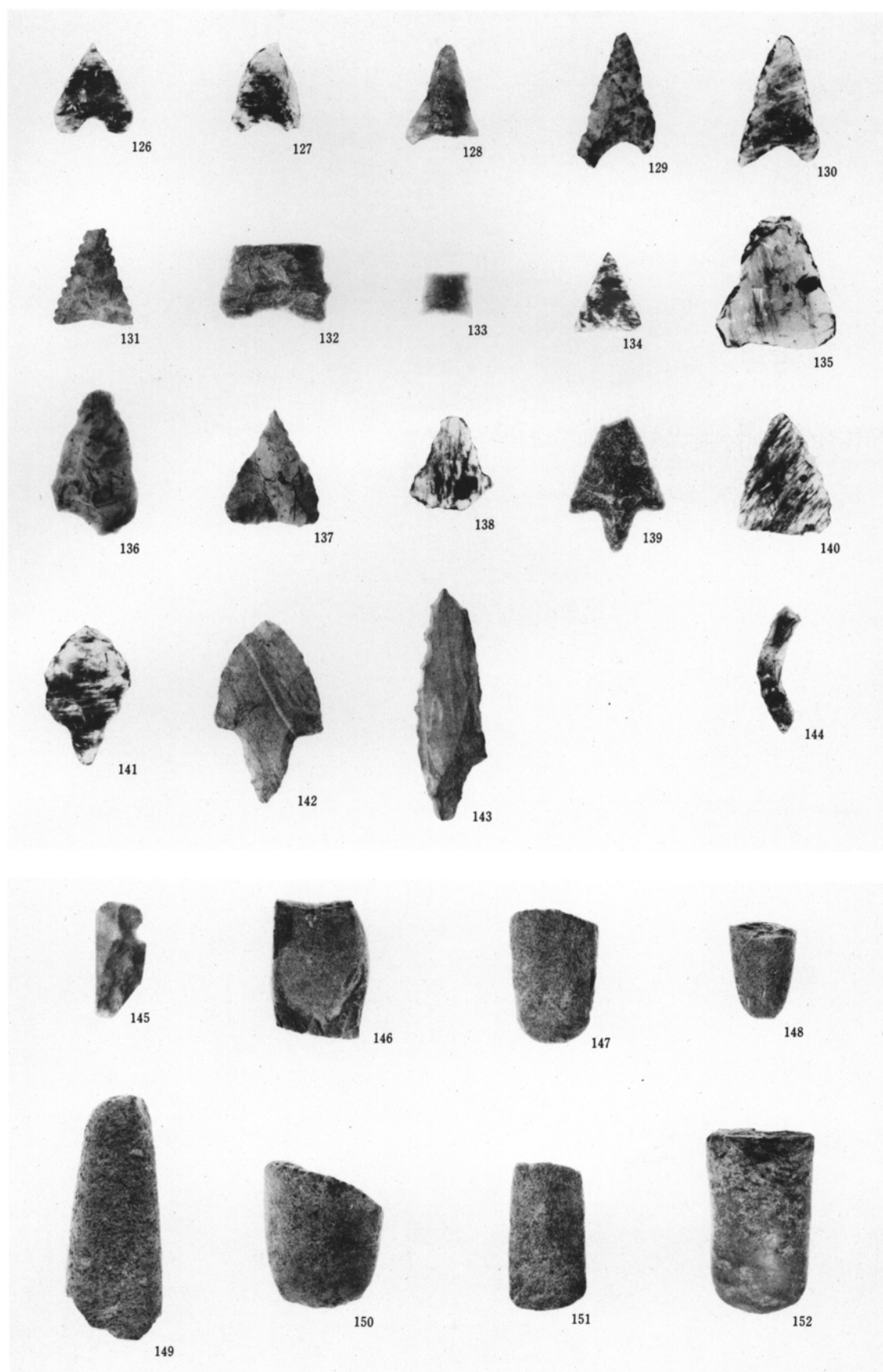
S B 102
(南西より)

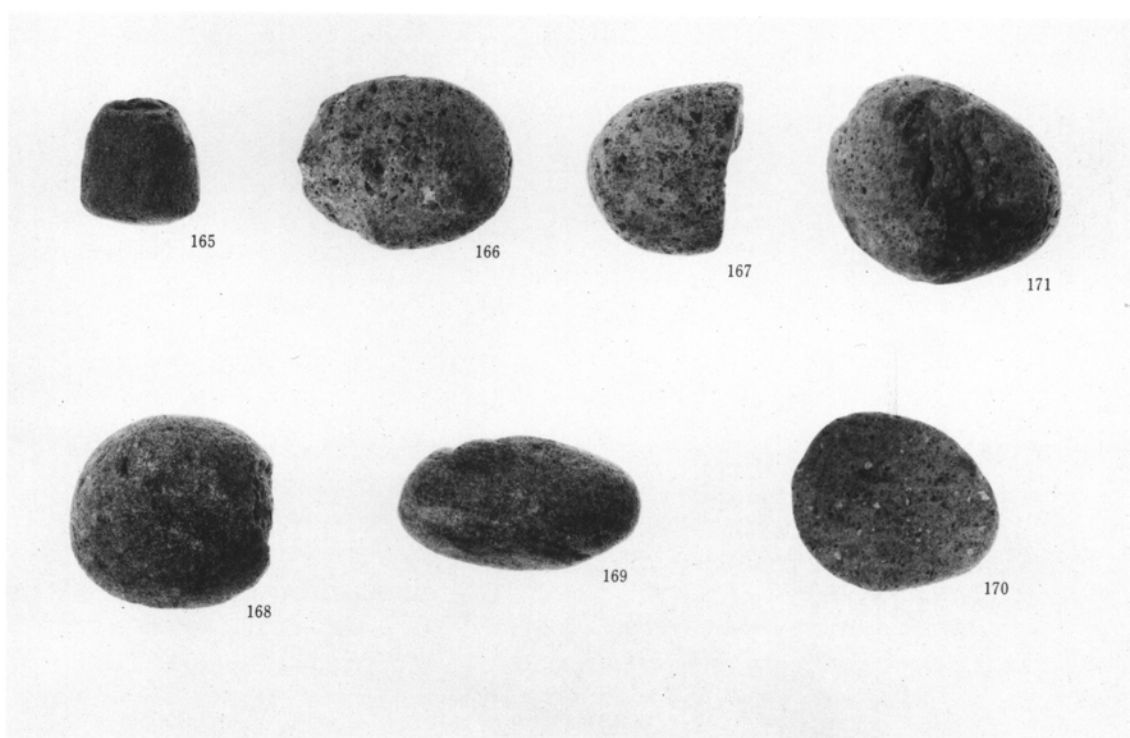
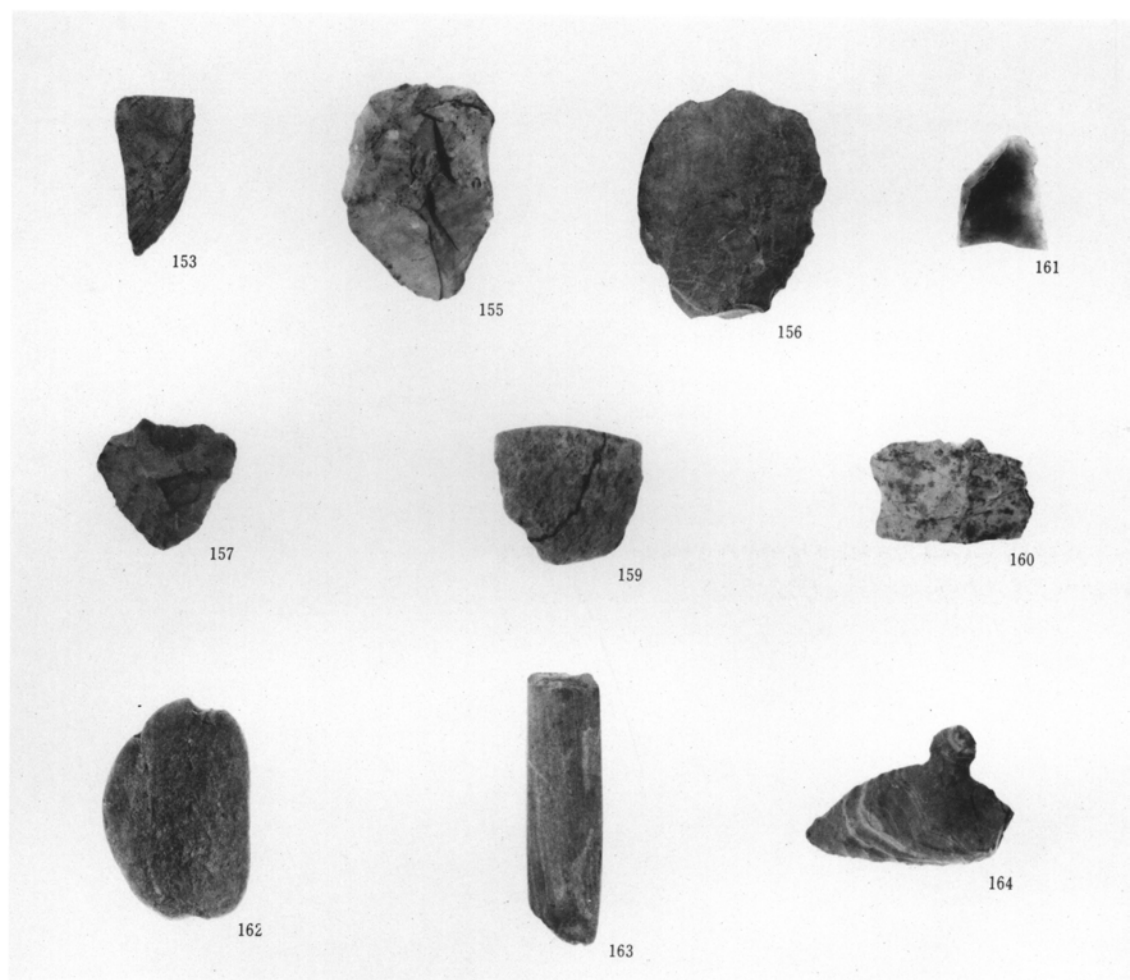












愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第41集

上の平遺跡

1992年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社 正 鶴 堂